

Reconsideration of the Daggers Decorated with Beast Musk Patterns on the Guard

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/45108

獣面型短剣についての再考察

八木 聡

(草原考古研究会・金沢大学大学院文学研究科修了)

I はじめに

中国北方系文化と中原系文化を結ぶ資料として、鐔に獣面を表現する短剣を挙げることが出来る。これまで花格剣や秦式短剣と呼ばれてきた短剣である。筆者は以前に上記の花格剣や秦式短剣を獣面型とまとめ、型式分類や編年、各型式間の関係を考察した〔八木 2012: 55-62 頁〕。しかし、その型式分類や編年には見直す部分があるため、本稿では改めて獣面型、鞘の型式分類、編年について考察していく。

II 研究史

考察に入る前に、簡単にこれまでの研究を振り返る。まず 1935 年に江上波夫は水野清一とともに、収集された北方系青銅器の分類を行う。短剣を A から H の 8 型式に分類する中で、中国的なモチーフが見られるものを G 型に分類する〔江上・水野 1935: 24-38 頁〕。1949 年にはマックス・レーンによるサックラー・コレクションを中心とした短剣の分類が行われる。全体を 12 の型式に分類し、第 12 グループに中原的意匠をもつ短剣を当てる〔M. Loehr 1949: 23-83 頁〕。また第 12 グループが更に細分できるとする。

後に高濱秀によって出土資料、各コレクションに散見される短剣をまとめる形で短剣の分類が行われる〔高濱 1982: 95-131 頁〕。獣面型については出土事例から短剣の年代についての考察を行う。また北方系の鞘の起源について、西周時代の中原的な鞘が起源となる可能性を指摘している。

1984 年には鄭紹宗が河北省北部で出土する中原的要素をもつ北方系青銅短剣を、花格剣と命名する〔鄭 1984: 45 頁〕。一方 1993 年に張天恩は渭水流域で出土する獣面型の短剣を秦式短剣と命名する〔張 1993: 25 頁〕。

張天恩は 1994 年に、花格剣と秦式短剣は基本的に異なる系統とした上で、秦式短剣が花格剣に紋様において影響を与えた可能性を指摘した〔張 1994: 448

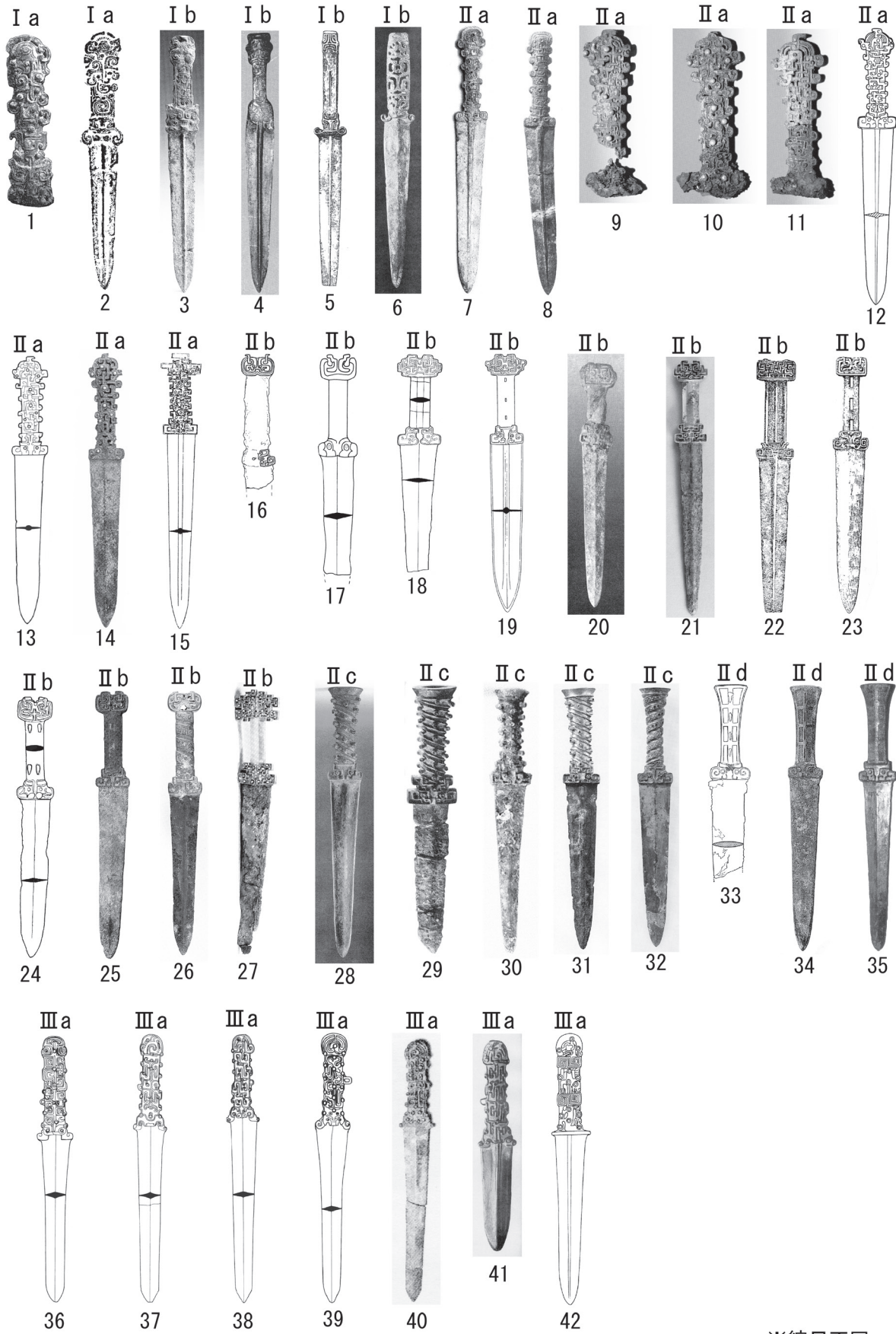
頁〕。また、2004 年に楊建華は獣面型の編年を行い、花格剣と秦式短剣はそれぞれ、宇村 1 号墓の短剣から生まれた型式であると考察している〔楊 2004: 80-82 頁〕。近年、楊建華は 2004 年の研究をもとに更に編年について考察し、宇村 1 号墓や黎城 10 号墓の短剣がアルタイやアフガニスタン、パミール高原からの影響を受けているとする〔楊 2013: 47 頁〕。以上が獣面型短剣の簡単な研究史である。本稿ではこれまでの研究のように、中原的意匠をもつ短剣を単純に花格剣と秦式短剣の 2 型式に分類することはできないと考え、両型式を含む鐔に獣面が見られる短剣を獣面型とした上で、分類、編年について考察を行っていく。

III 短剣の型式分類

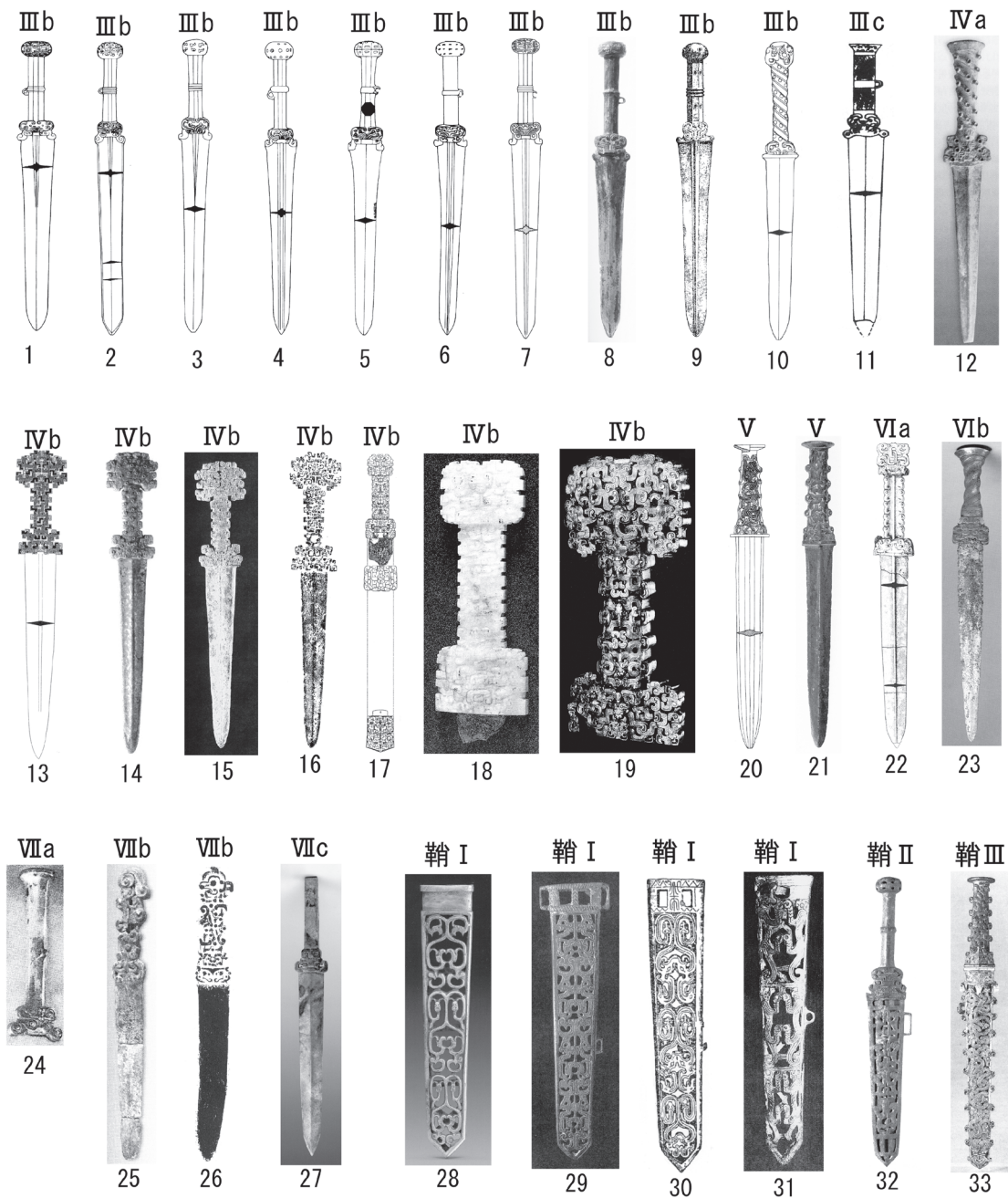
まず、本稿で扱う短剣、鞘を分類する。短剣は柄頭、柄、鐔、紋様によって全体を七つの型式に分類し、各型式の中で更に細分する。鞘は三つの型式に分類する。

I 型：鐔に細部まで精緻な獣面を表現する型式（図 1.1-6）。I 型は柄に蟠螭紋を表現する I a 型と、柄頭に鐔とは上下反転させた獣面を表現する I b 型に細分できる。I a 型は黎城墓地 10 号墓（図 1.1）〔張 2008: 42 頁〕、甘肅宇村 1 号墓（図 1.2）〔許・劉 1985: 350 頁 図 3.1〕で出土している。I b 型は南山根 101 号墓出土品（図 1.3）〔中国内蒙古文物考古研究所他 2007: 154 頁 No. 16〕、昔陽大寨出土品（図 1.4）〔中國青銅器全集編輯委員會 1995a: 182 頁 No. 203〕、ソーヤー・コレクション 1（図 1.5）〔M. Loehr 1949: 53 頁 PLATE IX. 31〕、古越閣所蔵品（図 1.6）〔王 1993: 189 頁〕を挙げる。

II 型：鐔の獣面が長方形で、剣身との境が水平になる型式（図 1.7-35）。本稿では更に a、b、c、d の四つに細分する。II a 型は柄、柄頭に蟠螭紋で装飾する型式（図 1.7-15）。資料として、テレーゼ & アーウィン・ハリス・コレクション 1（図 1.7）〔J. F. So and E. C. Bunker 1995: 49 頁 PLATE 10〕、大谷探検隊将



※縮尺不同



※縮尺不同

図 2. 短剣の分類 2

来品 TC-513-3 (図 1.8) [東京国立博物館 2005:38 頁 No.9]、圓頂山 98LD2 号墓出土品 1、2、3 (図 1.9-11) [礼県博物館他 2004:106 頁, 図 37.1, 2, 3]、大堡子山 I 25 号墓 (図 1.12) [早期秦文化聯合考古隊 2008:42 頁 図 38.4]、八旗屯 B27 号墓出土品 (図 1.13) [陝西省雍城考古工作隊他 1980:84 頁 図 23.2]、出光美術館所蔵品 (図 1.14) [東京国立博物館 1997:48

頁 No78]、益門村 2 号墓出土品 1 (図 1.15) [張天恩 1994:454 頁 図 4.1] を挙げる。

II b 型は、柄頭に向かい合う龍を表現する型式で、基本的に柄に紋様が見られないものが多い (図 1.16-27)。圓頂山 98LD2 号墓出土品 4 (図 1.16) [甘肅省文物考古研究所他 2005:13 頁 図 10.1]、譚家村 24 号墓出土品 (図 1.17) [宝鶏市考古工作隊 1991:395 頁 図

6.4]、隴県出土品(図1.18)[肖 1991:81頁 図5]、陝西省米脂県文管所所蔵品(図1.19)[曹他 2009:616頁]、孫家南頭村126号墓出土品(図1.20)[陝西省考古研究院他 2013:図版七.2]、白鶴美術館所蔵品(図1.21)[東京国立博物館 1997:48頁 No.80]、ソーヤー・コレクション2,3(図1.22,23)[M.Loehr1949:45頁 PLATE VIII .29,30]、オールドス収集品(図1.24)[田・郭 1986:10頁 図5.3]、テレーゼ&アーウィン・ハリス・コレクション2(図1.25)[J.F.So and E.C.Bunker1995:127 No.44]、シルクロード研究所所蔵品(図1.26)[東京国立博物館 1997:49頁 No.81]、益門村2号墓出土品2(図1.27)[鶴間監修 2004:83頁 No.47]を挙げる。

II c型は、柄が螺旋状になる短剣(図1.28-32)。古越閣所蔵品(図1.28)[王 1993:199頁]、鳳翔県八旗屯収集品(図1.29)[鳳翔県博物館編 2012:105頁 No.107]、毛家坪1045号墓(図1.30)[梁・侯 2014:63頁 真中]、個人所蔵品(図1.31)[E.C.Bunker. et al. 2002:83, No.48]、東京国立博物館所蔵品 TJ-5628(図1.32)[東京国立博物館 2005:37頁 No.8]を例として挙げる。

II d型は、柄頭と柄の境が明確でなく、柄から柄頭に向かって緩やかに広がる型式(図1.33-35)。景家荘1号墓(図1.33)[劉・朱 1981:299頁 図2.7]、テレーゼ&アーウィン・ハリス・コレクション3(図1.34)[J.F.So and E.C.Bunker 1995:128 No.45]、圓頂山98LD3号墓(図1.35)[礼県博物館他 2004 105頁 図36]を挙げる。

III型：鐔の獣面紋様の両端に牙を表現する型式で(図1.36-42、図2.1-11)、柄の側面にループが付くものが多い。また柄の表現により a、b、c の3型式に細分ができる。III a型は柄を蟠螭紋で飾る型式(図1.36-42)。例として玉皇廟13号墓、18号墓、300号墓、384号墓出土品(図2.36-39)[北京市文物研究所 2007:930頁 図583.3、928頁 図582.3, 930頁 図582.1, 2]、甘子堡8号墓(図1.40)[賀・劉 1993:図版3.2]、ワーナー・ジェニングズ・コレクション(図1.41)[M.Loehr1956:PLATE XXX VI No.92]、葫蘆溝24号墓(図1.42)[北京市文物研究所 2009:267頁 図187.2]をあげる。

III b型は柄頭が球形をなす型式で、玉皇廟7号墓、17号墓、52号墓、102号墓、227号墓、386号墓出土

品(図2.1-6)[北京市文物研究所 2007:928頁 図582.1, 925頁 図580.3, 926頁 図581.3, 928頁 図582.2, 926頁 図581.2, 1]、西梁堖6号墓出土品(図2.7)[北京市文物研究所 2009:512頁 図314.1]、東京国立博物館所蔵品 TJ-2195(図2.8)[東京国立博物館 2005:39頁 No.11]、ソーヤー・コレクション4(図2.9)[M.Loehr 1949:53 PLATE IX .32]、玉皇廟224号墓出土品(図2.10)[北京市文物研究所 2007:948頁 図596.2]が挙げられる。

III c型は柄が筒状の型式で、甘子堡9号墓で出土している(図2.11)[賀・劉 1993:29頁 図7.7]。

IV型：鐔に退化した獣面を表現する型式。多くは獣面とは分からない抽象的な表現をなす(図2.12-19)。柄の形状で a、b の2型式に細分する。IV a型は、柄が螺旋状をなすもので、陝西歴史博物館所蔵品を挙げる(図2.12)[代 2011:87頁 図7]。IV b型は柄頭、柄、鐔に退化した蟠螭紋を装飾するもので、益門村2号墓出土品3(図2.13)[宝鸡市考古工作隊 1993:4頁 図7.1]、大白揚廃品回収庫収集品(図2.14)[西安市文物保護考古所 2005:135頁 No.143]、古越閣所蔵品(図2.15)[王 1993:191頁]、國立故宮博物院所蔵品(図2.16)[國立故宮博物院編輯委員會編 1995:217頁]、喬家院墓地4号墓出土品(図2.17)[湖北省文物考古研究所他 2008:43頁 図22.4]、浙川下寺10号墓出土品(図2.18)[中國玉器全集編輯委員會 1993:53頁 No.88]、大英博物館所蔵品(図2.19)[J.F.So et. al 1995:43頁, Fig63]を挙げる。

V型：一字形の鐔、碗形の柄頭をもつ型式(図2.20, 21)。鐔には退化した獣面が付属し、柄には蟠螭紋から変化したと思われる紋様が見られる。本稿では、靈寿城3号夯土建築跡出土品(図2.20)[河北省文物研究所 2005:19頁 図9]、中近東文化センター所蔵品(図1.21)[東京国立博物館 1997:68頁 No.117]を資料として挙げる。

VI型：他の型式と比較し、鐔の獣面が逆さまに表現される型式(図2.22, 23)。柄に鳥頭紋が並ぶVI a型と、柄の形状が螺旋形のVI b型に細分される。VI a型の資料として琉璃閣出土品を(図2.22)[陳 1967:図版10]、VI b型の資料として琉璃閣甲墓出土品を挙げる(図2.23)[河南博物院他 2003:128頁]。

VII型：上記のどの型式にも当てはまらない型式(図2.24-27)。a、b、c の3型式に細分する。VII a型は、

柄から柄頭に向かってラップ状に広がり、柄の断面が八角形をなす型式。劉家店子1号墓出土で出土している(図2.24)[山東省文物考古研究所他1984:図版2.4]。Ⅶb型は、Ⅱb型と柄の表現が類似する型式(図2.25、26)。図版がやや不鮮明で鐔の表現がはっきり分からないため、Ⅶ型に分類する。東古廟村出土品(図2.25)[安丘市博物館2012:19頁 図12]、大竹山島出土品(図2.26)[李・林1992:95頁 図4]がこの型式にあたる。Ⅶc型は柄から剣身まで玉で出来ている短剣で、韓城27号墓で出土している(図2.27)[蔡・孫2007:167頁]。

以上が獣面型短剣の分類であるが、本稿では鞘も扱い、三つの型式に分類する(図2.28-33)。鞘Ⅰ型は全体が透かし彫りで、龍や獣が表現される型式で、韓城27号墓出土品(図2.28)[蔡・孫2007:165頁]、古越閣所蔵品(図2.29)[王1993:189頁]、サックラー・コレクション5(図2.30)[M.Loehr 1949:53 PLATE IX.31 scabbard]、ホームズ夫人収集品(図2.31)[梅原1934:第45図.左]を資料として挙げる。鞘Ⅱ型はⅢb型とセットになる型式で、鞘口に短剣の鐔に表現される獣面を反転させたものが見られる。スウェーデン・東アジア博物館所蔵品(図2.32)[東京国立博物館1997:65頁 No.111]を挙げる。鞘Ⅲ型はⅤ型とセットになる鞘で、Ⅴ型の柄と同様の紋様を透かし彫りで鞘に表現する。メイヤー・コレクションを例として挙げる(図2.33)[R.Whitfield 1993:52 Plate26]。

Ⅳ 編年

本章では、上記の分類をもとに短剣の編年を行う。年代の区分は、林巳奈夫に従う[林1984:187-189頁]。つまり、西周は商滅亡の前1027年から平王東遷の前770年までとし、春秋時代は平王東遷から晋三分の前453年とする。西周時代、春秋時代はそれぞれ前期、中期、後期に区分する。戦国時代は小澤正人の区分に従い[小澤2005:210頁]、前期、中期をそれぞれ100年とし、統一秦までを含む50年を後期とする。

1 西周後期

この時期に、はじめて獣面型の短剣としてⅠa型とⅠb1型が出土する(図1.1-3, 図3.1, 2)。筆者は、以前にⅠb1型に分類した南山根101号墓出土の短剣を春秋前期としたが[八木2012:57頁]、黎城墓地10

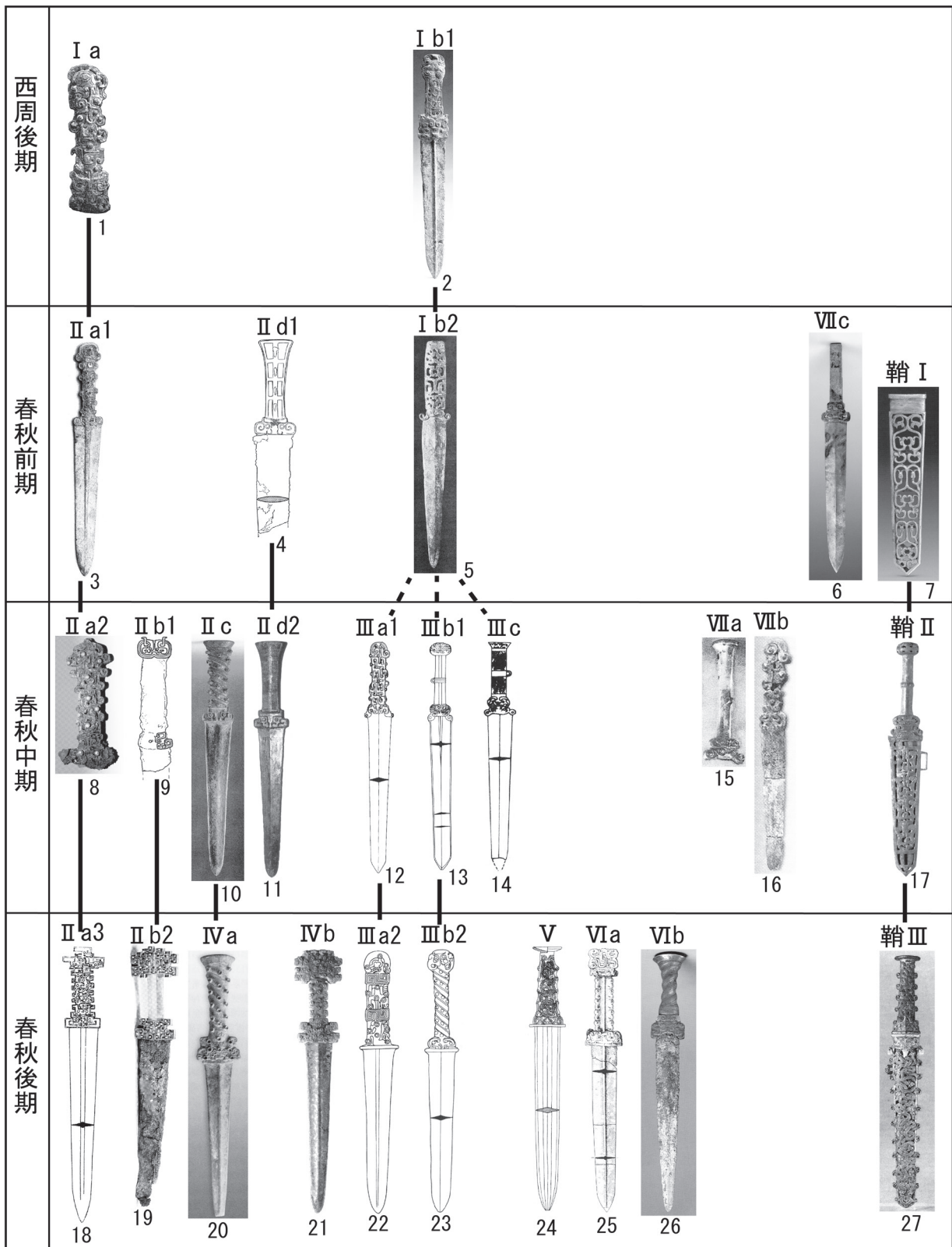
号墓が西周後期と考えられ[張2008:42頁]、Ⅰa型とⅠb1型が類似した鐔をもつことからⅠb1型も西周後期に遡ると考える。また、これまで銅柄鉄剣の最も早い例は上村嶺虢国墓地2001号墓のものであったが(図4.1)[中國文物精華編輯委員會編1992:No.104]、ほぼ同時期に遡る銅柄鉄剣が黎城墓地10号墓で出土していることは、特筆すべき点である(図1.1, 図3.1)。

2 春秋前期

春秋前期にはⅠa型から変化したⅡa1型(図1.7, 8, 図3.3)やⅡd1型(図1.33, 34, 図3.4)が出現する。筆者は以前、本稿におけるⅡa1型を春秋中期に、Ⅱa2型を春秋前期とした[八木2012:56頁 図1.3, 7]。しかし、Ⅱa1型の柄頭の形状がⅠa型に近く、Ⅱa2型がⅡa3型に近いことから、現在はⅡa1型の方がⅡa2型よりも古い型式だと考える。Ⅰb1型は鐔、柄頭の獣面が退化したⅠb2型へ変化する(図1.4-6, 図3.5)。特にⅠb2型の中でも古越閣所蔵品の柄と類似した紋様は鞘Ⅰ型の中にも見られることから(図1.6, 図2.28-30)、Ⅰb2型と鞘Ⅰ型、韓城27号墓で鞘Ⅰ型と共伴するⅦc型(図2.27, 図3.6)は同時期と考える。

春秋中期

春秋中期には、Ⅱa1型はより細かい紋様をもつⅡa2型に変化するが(図1.9-14, 図3.8)、Ⅱa1型とⅡa2型の間にはⅡa1型の僅かな変化を経ている可能性が考えられる。それは柄頭の形状変化と紋様表現の平面化である。テレーゼ&アーウィン・ハリス・コレクション1と大谷探検隊将来品TC-513-3を比較すると、テレーゼ&アーウィン・ハリス・コレクション1は柄頭の左右両側面に大きな突起が見られるが(図4.2)[J.F.So and E.C.Bunker 1995:49頁 PLATE10]、大谷探検隊将来品TC-513-3には片側面のみに見られる(図4.3)[東京国立博物館2005:38頁 No.9]。大谷探検隊将来品TC-513-3のような柄頭は本稿で春秋中期としたⅢa1型やⅦb型にも見られる特徴であり(図3.12, 16)、Ⅱa1型の中でも時期が下る可能性がある。また大谷探検隊将来品TC-513-3を東京国立博物館で実見した際に、紋様の表現が平面的な印象を受けた。時間の経過とともに紋様に大きな変化はないが、表現



※縮尺不同

図 3. 編年図

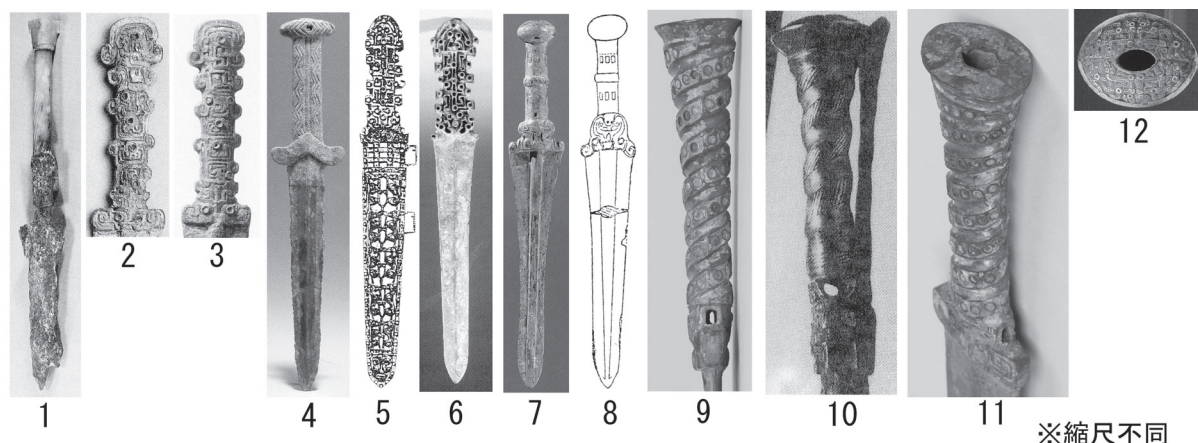


図4. 関連資料 1 上村嶺號国墓地 2001 号墓 2 テレーゼ&アーウィン・ハリスコレクション 1
3 大谷探検隊将来品 TC-513-3 4 甘子堡 8 号墓 5 ルー・コレクション 6 河北省懷来大古城
7 サックラー・コレクション V-7315 8 河北省超梁溝 9 東京国立博物館 TJ-5628 側面
10 琉璃閣甲墓出土短剣側面 11 東京国立博物館 TJ-5628 柄頭上面 12 琉璃閣甲墓出土短剣柄頭上面

が平面的になる事例については、以前に筆者が八字形の鐔をもつ短剣で示した〔八木 2014:136 頁〕。また時期が異なるが、北方系の帯飾板でも同様のことが見られることから〔小田木 2005: 87 頁, 東京国立博物館 2005: 271-272 頁〕、テレーゼ&アーウィン・ハリス・コレクション 1 より大谷探検隊将来品 TC-513-3 の方が年代的にやや下ると言える。

Ⅱ d1 型は鐔の獣面が全体的に角張った形状のⅡ d2 型となる(図 1. 35, 図 3. 11)。Ⅱ型は新たにⅡ b1 型とⅡ c 型が出現する(図 1. 16-26, 28-32, 図 3. 9, 10)。Ⅱ b1 型は圓頂山 98LD2 号墓でⅡ a2 型と共伴し(図 1. 9-11, 16, 図 3. 8, 9)、Ⅱ c 型のなかでも古越閑所蔵品の獣面の表現と圓頂山 98LD3 号墓出土品の獣面の紋様が類似することから(図 1. 28, 35, 図 3. 10, 11)、Ⅱ a2 型とⅡ b1 型、Ⅱ c 型とⅡ d2 型は同時期と考える。

以上はⅡ型の相対年代についての考察であるが、この時期の絶対年代となると、Ⅱ a2 型を出土する八旗屯 B27 号墓の年代が問題となる。八旗屯 B27 号墓の年代は報告では春秋初期であるが〔陝西省雍城考古工作队他 1980:78 頁〕、中期前半〔陳 1984:69 頁〕や後期前半〔岡村 1985:57 頁, 陳 2004:30 頁, 図 2〕とする考えもある。本稿では鳳翔八旗屯 B27 号墓の年代について、益門村 2 号墓出土品をはじめとする関連する資料との比較から考察を行う。まず益門村 2 号墓の年代であるが、本稿で春秋中期とした白鶴美術館所蔵品であるⅡ b1 型と益門村 2 号墓出土のⅡ b2 型を比較する。Ⅱ b1 型と比べⅡ b2 型の鐔の獣面は、目の

部分以外にも目の部分と同様の孔が穿っておりトルコ石が象嵌されている(図 5. 5, 6)〔東京国立博物館 1997:48 No. 80, 陝西歴史博物館編 2008:49 頁〕。柄頭も紋様の退化が見られることからⅡ b2 型がⅡ b1 型より相対的に年代が下ると考えられる。また、益門村 2 号墓で出土する玉器と類似したものが秦公 1 号墓でも出土している(図 5. 1-4)〔劉 2006:136 頁 BY5, 76 頁 FN23, 168 頁 BY61(a 面拓片), 129 頁 FN121(a 面拓片)〕。秦公 1 号墓が春秋後期前半と考えられることから〔劉 2006:12 頁〕、益門村 2 号墓も同様に春秋後期前半と言える。

次に八旗屯 B27 号墓の短剣との比較を行う。八旗屯 B27 号墓出土のⅡ a2 型と益門村 2 号墓出土のⅡ a3 型を比較するとⅡ a3 型の方が柄頭、柄の蟠螭紋が退化しており年代が下る事がわかる(図 5. 7, 8)〔陝西省雍城考古工作队他 1980:84 頁 図 23. 2, 代 2011:86 頁 図 5〕。以上、益門村 2 号墓が春秋後期前半と考えられ、八旗屯 B27 号墓出土のⅡ a2 型が益門村 2 号墓出土のⅡ a3 型より形式的に古い点から、八旗屯 B27 号墓は春秋中期まで遡ると考える。この事は八旗屯 B27 号墓出土の青銅器を春秋中期後半とする林巳奈夫の研究とも整合する〔林 1999:382 頁〕。しかし、八旗屯 B27 号墓が春秋中期後半まで遡るとすると秦家溝 1 号墓との前後関係が問題になるが、同じく林巳奈夫は秦家溝 1 号墓の年代を春秋中期後半としている点から〔林 1999:406 頁〕、両遺跡は同時期と言える。

話を短剣の編年に戻すと、八旗屯 B27 号墓の年代か

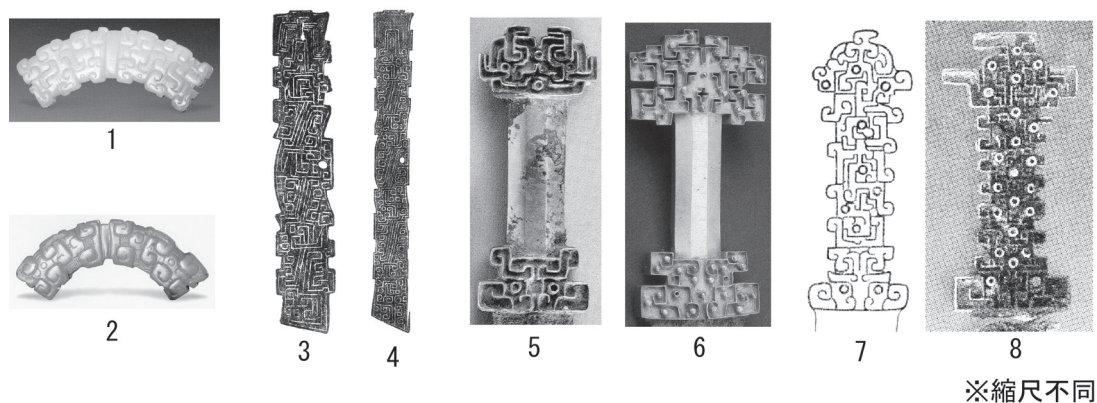


図 5. 春秋中期関連遺物

1 益門村 2 号墓 4 2 秦公一号墓 1 3 益門村 2 号墓 5 4 秦公一号墓 2 5 白鶴美術館
6 益門村 2 号墓 2 7 八旗屯 B27 号墓 8 益門村 2 号墓 1

ら少なくともⅡ a2 型が春秋中期後半まで遡ることが分かった。しかし年代のはっきり分かる資料が少なく、春秋時代前期、中期、後期の各時期をさらに前半と後半に細かく分けて短剣の編年を組むことは現時点で難しいため、本稿ではⅡ a2 型の年代に幅を持たせ、春秋中期とする¹⁾。

春秋中期は鐔の獣面の類似から、Ⅰ b2 型から影響を受けたと考えられるⅢ型や（図 1.36-41, 図 2.1-9, 11, 図 3.12-14）、Ⅶ a 型（図 2.24, 図 3.15）、Ⅶ b 型（図 2.25, 26, 図 3.16）、鞘Ⅱ型（図 2.28-31, 図 13.17）が新たに出現する。

Ⅲ型については、甘子堡 8 号墓でⅢ a1 型と鐔が八の字形となる短剣と共伴している（図 4.4）[中國青銅器全集編輯委員會 1995b:11 頁 No.16]。この点からⅢ a1 型と鐔が八の字形となる型式は同時期と考えられるが、Ⅲ b1 型、Ⅲ c 型もⅢ a1 型と類似した鐔をもつことから、これらの型式も甘子堡 8 号墓と同時期と考える。Ⅲ a1 型とⅢ b1 型については柄、鐔の表現がやや崩れたものが存在する（図 4.5-8）[E. C. Bunker et al. 1997:197 Fig. 130.3, 中國青銅器全集編輯委員會 1997:140 頁 No.138, E. C. Bunker et al. 1997:180 No.95, 鄭 1984:38 頁 図 1.17]。これを紋様の退化と見て取れるなら、Ⅲ a1 型、Ⅲ b1 型の中でも時期が若干下ると考えられる。また、上述したようにⅢ a1 型とⅦ b 型はⅡ a1 型、特に大谷探検隊将来品 TC-513-3 の型式からの影響を受けていると言える。

4 春秋後期以降

Ⅱ a 型とⅡ b 型は柄頭、柄、鐔の獣面が退化したⅡ

a3 型、Ⅱ b2 型となる（図 1.15, 27, 図 3.18, 19）。Ⅱ c 型はより鐔の紋様に退化が進み、獣面と判別できないⅣ a 型へと変化する（図 2.12, 図 3.20）。Ⅳ a 型がⅡ型から派生した型式とすると、この時期に現れるⅣ b 型もⅡ型からの派生型であると言える（図 2.13-19, 図 3.21）。Ⅲ型は一字形の鐔となる（図 1.42, 図 2.10, 図 3.22, 23）。春秋後期にはⅤ型、Ⅵ型も出現する（図 2.20-23, 図 3.24-26）。特にⅥ b 型は柄の形状、ラグビーボール状の柄頭の中央部に孔があいている点、鐔の側面に貫通する孔が見られる点より、Ⅱ c 型から影響を受けていると考える（図 4.9-12）[TNM Image Archives No.E0053813, 黄・李 2007:49 頁 図 7, TNM Image Archives No.E0053815, 河南博物院他 2003:128 頁]²⁾。鞘については、Ⅴ形とセットになる鞘Ⅲ型がコレクション資料の中に確認されている（図 2.33, 図 3.27）。

戦国時代に入ると獣面型の短剣は見られなくなるが、前漢時代とされる満城漢墓で二本の獣面型の短剣が出土している（図 6.1, 2, 7）[中国社会科学院考古研究所他 1980: 図版 44.4, 図版 66.1, 2]。1 本はⅢ b1 型で、既に高濱が指摘している通り長い伝世の結果と考えられる（図 6.1）[高濱 1982:107 頁]。もう一本は、鐔に獣面を逆さまに表現し、剣身には各側面に異なる紋様が見られる（図 6.2, 7）。剣身の紋様は、片面は北方系文化の鹿の角の表現を取り入れたもので（図 6.2-6）[中国社会科学院考古研究所他 1980: 図版 66.1, 蓋 1986: 図版 12.1 右, 図版 12.2 左, 高濱・岡村編 2000:340 頁 図 405, 伊克昭盟文物工作端他 1980:2 頁 図 3.6]、もう片面は北方文化の怪獣紋の角

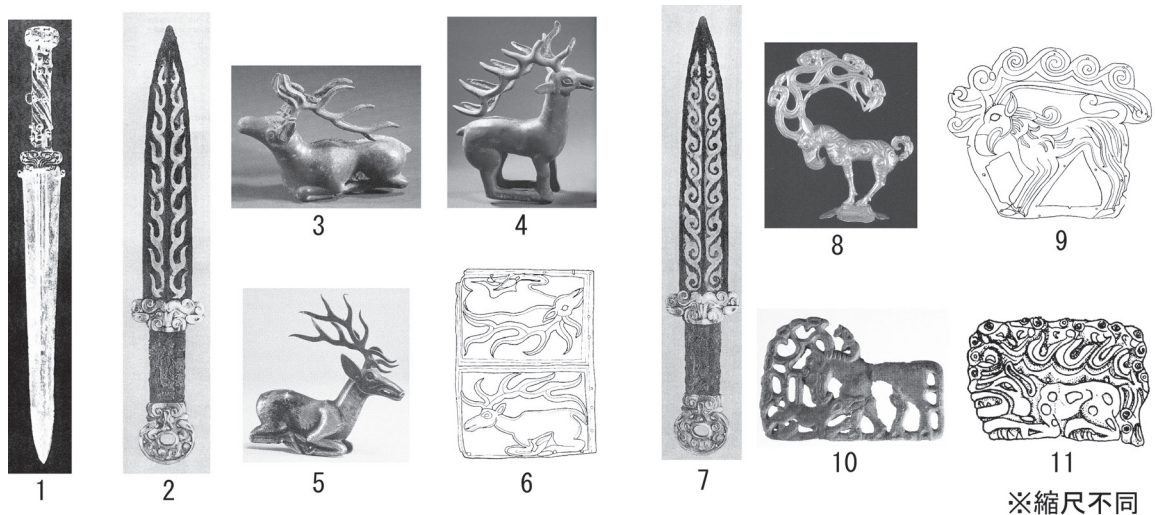


図 6. 満城漢墓出土品と関連遺物

1 満城漢墓 1 2 満城漢墓 2 3 速機溝 1 4 速機溝 2 5 納林高兔 1 6 西溝畔 1 7 満城漢墓 2
8 納林高兔 2 9 西溝畔 2 10 西岔溝 11 阿魯柴登

の表現を取り入れたものとする（図 6.7-11）〔中国社会科学院考古研究所他 1980：図版 66.2，高濱・岡村 2000：323 頁 図 297，伊克昭盟文物工作隊他 1980：2 頁 図 3.3，中國青銅器全集編輯委員會 1995b，79 頁 No.107，田・郭 1980：335 頁 図 3.11〕。つまり、中原的な獣面紋様に北方系文化で見られる鹿や怪獣紋の角の表現を組み合わせ、新しいモチーフを作り上げており、中原系文化と北方系文化の関係を考える上で極めて重要な資料と言える。

以上、獣面型の編年について考察を行った。獣面型の編年を概観して分かることは、獣面型の中にはⅡ型からの影響を受けた型式やⅡ型から派生した型式が多く見られる点である。Ⅱ型は渭水流域で出土しており（図 10）、この地域で獣面型がどのように出現したか、次章で考察する。

V 獣面型の起源

筆者は、以前に獣面型の短剣の起源についてまとめたが〔八木 2012：60〕、本節では新たな資料を加えてこの問題について改めて考察を行う。そのため、以前に執筆したものと一部重複する部分もあるが、ご了承頂きたい。また結論を先に述べると、西周時代後期から春秋時代前期にかけて、渭水流域が北方系文化と密接な関係を持つなかで獣面型の祖型が渭水流域で造られ、発展していったと考える。以下各時期の時代背景とともに詳しく見ていく。

1 西周前期・中期

カラスク型の短剣が渭水流域から遼西地域にかけて出土、収集されている（図 7.3-13）〔北京市文物管理处 1976：253 頁 図 9.1，図版 3.7，253 頁 図 9.2-5，王 1990：58 頁 図 2.8，建平県文化館他 1983：680 頁 図 2.1，王・水 1997：437 頁 図 93.1，邵 2004：82 頁，祝・李 2004：15 頁 図 6〕。剣身の基部に刻みを入れたような鐔をもっており、ミヌシンスク地域のカラスク文化との関係が伺える。また、西周中期には陝西省茹家荘 1 号車馬坑で車馬具が出土しているが（図 8.1）〔盧・胡 1988：403 頁 図 272.1〕、この車馬具に表現されている人物の背中に鹿の刺青と思われる表現が見て取れる。これと類似した資料はモンゴルのオラーン・オーシグ遺跡に見られる鹿石の中に見いだすことが出来る。そもそも、鹿石の中にはオラーン・オーシグ 14 号鹿石のように人の顔が表現されたものがあり（図 8.6）〔Takahama Shu et al. 2006：102 頁 Pl.20.1〕、中間よりも下の位置に帯状の紋様がある。そこに武器や工具が表現されていることから、武装した人物を表現した物であることが分かる〔高濱 1999：90 頁〕。このことから、鹿石に表現される鹿は茹家荘 1 号車馬坑出土の車馬具と同様に刺青の表現であると考えられる。また、オラーン・オーシグの鹿石にはカラスク型の短剣が描かれているが（図 8.2-5）〔Takahama Shu et al. 2006：96 Pl.14.2，97 Pl.15.2，99 Pl.17.1，101 Pl.19.1〕、その他にも北方系文化とのつながりを思わ

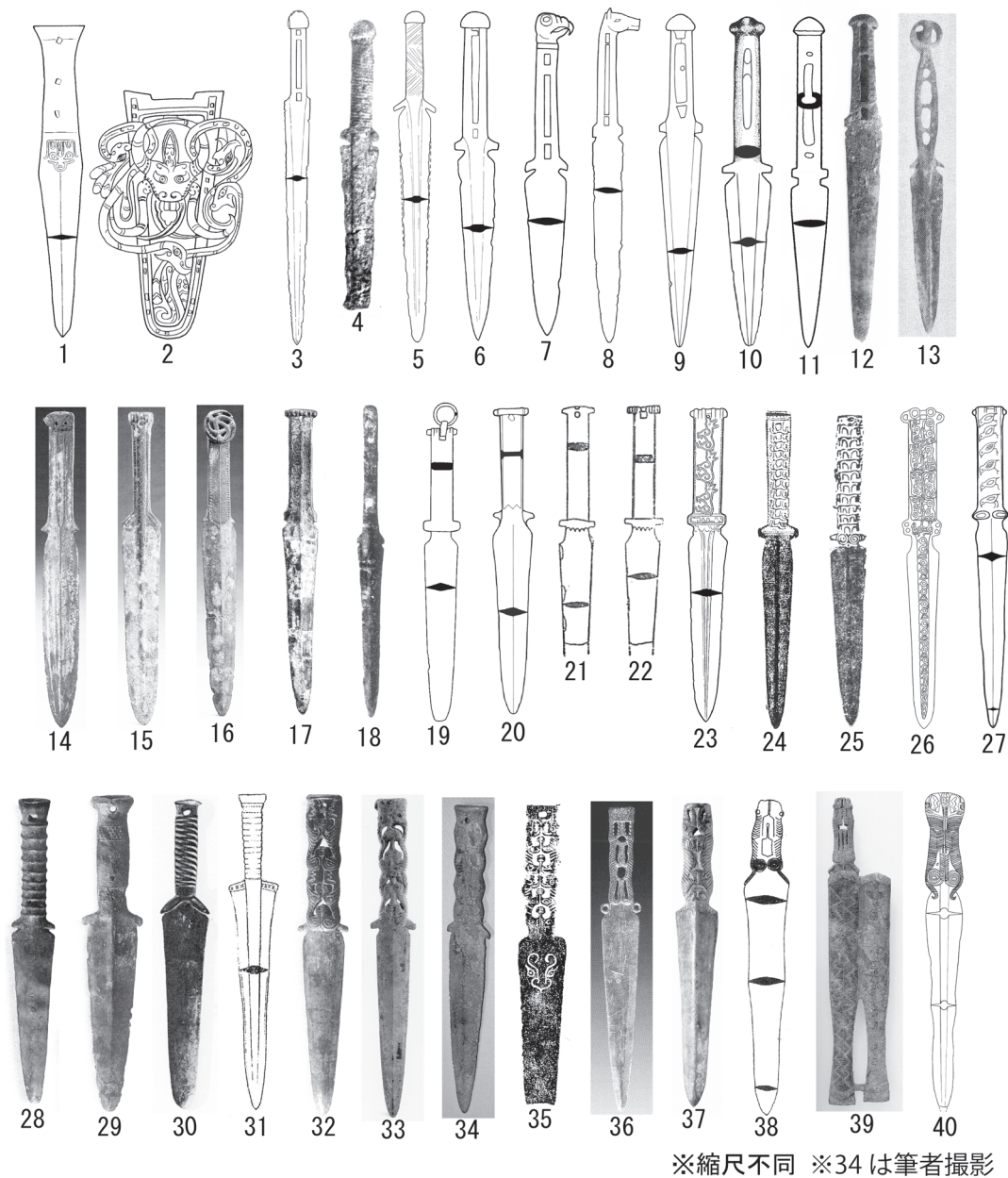
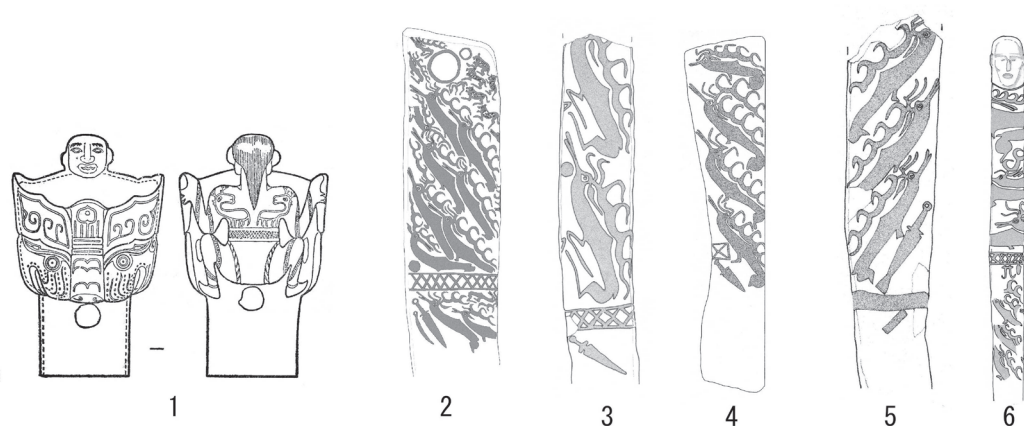


図 7. 関連資料 2 1 少陵原 280 号墓 1 2 少陵原 280 号墓 2 3 昌平白浮 2 号墓 1
 4 昌平白浮 2 号墓 2 5 昌平白浮 3 号墓 1 6 昌平白浮 3 号墓 2 7 昌平白浮 3 号墓 3
 8 昌平白浮 3 号墓 4 9 小河南村 10 大荒地 1 号墓 11 合水九端 24 号墓 12 敖漢旗収集品
 13 甘肅省柳家村 14 南山根 15 南山根 101 号墓 1 16 南山根 101 号墓 2 17 南山根 101 号墓 3
 18 南山根 101 号墓 4 19 小黑石溝 98NDXAⅢ5 号墓 20 寧城瓦房中 791 号墓 21 河北省青龍 1
 22 河北省青龍 2 23 小黑石溝 92NDXAⅡ5 号墓 24 山嘴郷 25 東南溝 6 号墓 26 小黑石溝
 27 天巨泉 7301 号墓 28 西安市大白楊废品回收庫 1 29 西安市大白楊废品回收庫 2
 30 河北省承德市 31 内蒙古小梁前 32 西安市文物商店移交品 33 鄂爾多斯青銅器博物館
 34 陝西省滌峪口 35 西高泉村 1 号墓 36 甘肅省原州区 37 東アジア博物館
 38 汐子北山嘴 7501 号墓 39 東京国立博物館所蔵品 TJ-5675 40 南山根 101 号墓 5



※縮尺不同

図 8. 関連資料 3 1 茹家荘 1 号車馬坑 2 オラン・オーシグ 4 号鹿石

3 オラン・オーシグ 6 号鹿石 4 オラン・オーシグ 8 号鹿石 5 オラン・オーシグ 12 号鹿石

6 オラン・オーシグ 14 号鹿石

せる表現がしばしば見られることがすでに指摘されている〔畠山 1992:207-225 頁〕。以上の点から、西周前期から中期にかけて渭水流域が北方系文化と関係をもっていたと考えられる。

2 西周後期から春秋前期

遼西地域を中心に変化したカラスク型の短剣が出土しているが（図 7. 14-27）〔中國内蒙古文物考古研究所他 2007:162 頁 No. 24, 159 頁 No. 22, 160 頁 No. 23, 158 頁 No. 20, 遼寧省昭烏達盟文物工作端他 1973: 図版 6.5, 内蒙古自治区文物考古研究所他 2009:389 頁 図 314.2, 寧城県文化館他 1985:27 頁 図 7.4, 鄭 1984:38 頁 図 1.5.4, 内蒙古自治区文物考古研究所他 2009:346 頁 図 280, 楊 1997:89 図 2, 河北省博物館他 1977:53 頁 図 6.1, 内蒙古自治区文物考古研究所他 2009: 396 頁 図 320.1, 寧城県文化館他 1985:30 頁 図 12.1〕、中には柄がソケット状になる型式の短剣が収集されている（図 7.28, 29）〔西安市文物保護考古所 2005:138 頁 No. 151, 150〕。特に柄に弦紋が表現される型式（図 7.28）と類似した短剣が河北省承德市や内蒙古小梁前で出土しており（図 7.30, 31）〔河北省博物館他 1980:114 頁 図 203, 邵 1993:24 頁 図 9.2〕、渭水流域と河北省北部、遼西を結びつける資料と言える。

また西周後期から春秋前期にかけての時期は、柄に向かい合う虎を表現する短剣も見られる（図 7.32-40）〔西安市文物保護考古所 2005:138 頁 No. 149, 鄂

爾多斯博物館 2006:50, 筆者撮影, 宝鶏市博物館他 1980:3 頁 図 5, 寧夏固原博物館 2004:71 頁 No. 37, 東京国立博物館 1997:46 頁 No. 73, 寧城県文化館他 1985:25 頁 図 4.1, 東京国立博物館 2005:25 頁 口絵 1, 中國内蒙古文物考古研究所他 2006:166 頁 No. 28〕。この型式の短剣は、出土する地域によって描かれる虎の数に違いが見られる。合計 4 匹の虎を表現する剣は陝西省や甘肅省で出土しており（図 7.34-36）、合計 2 匹の虎を描く短剣は遼西地域で出土しているが（図 7.38, 40）、虎の表現の類似性から時期はほぼ同時期と言える。そして、中には鐔にカラスク型の特徴が見られる短剣が存在する（図 7.32-34）。陝西省歴史博物館には陝西省澇峪口で出土した資料が所蔵されている（図 7.34）。南山根 101 号墓では I b1 型、変化したカラスク型と虎を表現する短剣が共伴しており（図 1.2, 図 7.15-18, 40）、I b1 型が出土した南山根 101 号墓が渭水流域と関係をもっていたことを窺わせる。

3 獣面型の祖型

これまで、西周時代に渭水流域と北方系文化の関係について見てきたが、上記のようなつながりを背景に西周中期に少陵原 280 号墓で出土した獣面型の祖型が造られたと考える（図 7.1）〔陝西省考古研究所 2009:387 頁 図 379.1〕。少陵原 280 号墓出土の短剣を獣面型の祖型とする理由として、全体が一鑄で造られ、剣身基部に獣面につながると思われる紋様が表現されている点、共伴している鞘が北方系青銅器の鞘の祖型

と考えられる点を挙げる（図 7.2）[陝西省考古研究所 2009:387 頁 図 379.2, 高濱 1982:105-107 頁]。ただし少陵原 280 号墓の短剣と本稿のⅠ型との間に形状面で隔たりもあるようにも思われる。そのため、少陵原 280 号墓の短剣からⅠ型への変化のプロセスは今後の課題としたい。

以上のことから、カラスク型の短剣や鹿石が示すように、西周前期から中期には既に渭水流から遼西地域が密接なつながりをもっていたと言える。その中で、西周中期に獣面型の祖型である短剣が少陵原 280 号墓で出土する。そして西周後期から春秋前期に、渭水流域から遼西地域にかけて変化したカラスク型や柄に虎が表現される短剣が拡がる一方で、獣面型も同様の地域で発展していくと考える（図 11）。

Ⅵ 春秋中期の渭水流域と燕山地域

春秋中期の短剣の分布を見ると、出土が渭水流域に集中していることが分かる（図 12）。一方、燕山地域でも玉皇廟墓地を中心に獣面型の短剣が出土している（図 1.36-40, 42, 図 2.1-7, 図 12）。特にⅢ a1 型は、柄の紋様から渭水流域で出土するⅡ a1 型との関係を見て取れる（図 1.36-40, 図 1.7, 8）。しかし両地域は地理的に離れており、その類似が偶然でないとすると、どのようなルートで渭水から燕山に情報が伝わったのかということが問題となる。本節では関連する資料をもとに、渭水流域から燕山地域へと文化がどのように伝わったのか、ということについて考察を行う。

まず、獣面型の短剣と同様に西周から春秋にかけて渭水流域と燕山地域を含む地域で出土する鍔について見ていく。鍔の分類は、高濱秀に従う[高濱 2011:12-29 頁]。以下、本題に入る前に簡単に各型式について説明する。

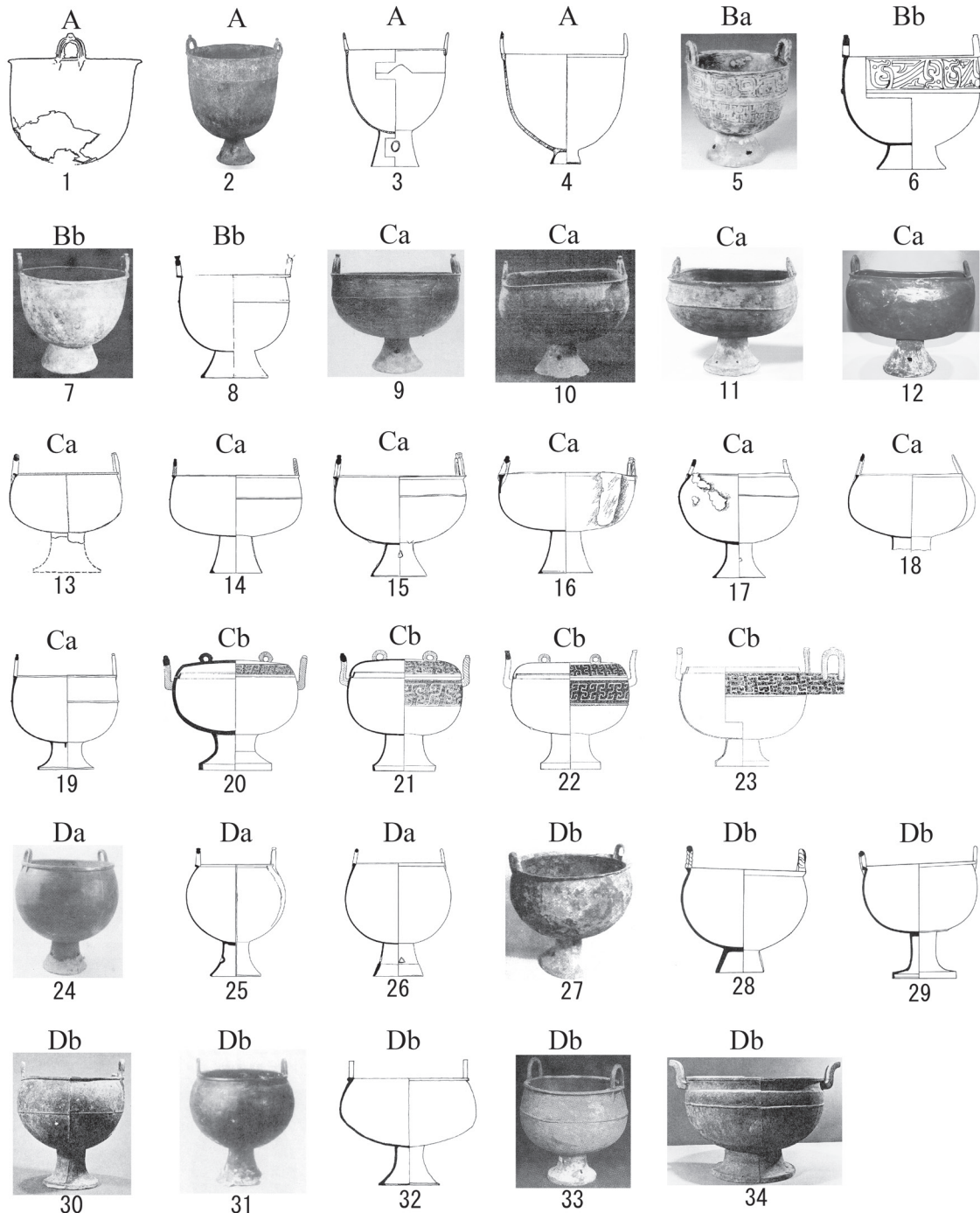
A 型：中国において最初に現れる型式（図 9.1-4）。全体が深鉢形で、多くは把手の上部に小さな突起が見られる。西撥子村（図 9.1）[北京市文物管理处 1979:228 頁 図 2.1]、范家寨（図 9.2）[西安市文物保護考古所 2005:35 頁 No. 34]、包頭市麻池古城出土品（図 9.3）[内蒙古自治区文物考古研究所 2004:201 頁 図 10]、岐山県王家村出土品（図 9.4）[龐・崔 1989:91 頁 図 1] で出土している。

B 型：中原系の鑄造技術で作られたもので、中原風の紋様を持つ型式（図 9.5-8）。鑄造の粗雑な Ba 型

と精緻な Bb 型に分かれる。Ba 型は、甘肅省礼県で出土しており（図 9.5）[李 2000: 背表紙裏 2]、Bb 型は鳳翔県雍城遺跡（図 9.6）[陝西省雍城考古隊 1984:30 頁 図 7.2]、宝鶏県甘峪（図 9.7）[高・王 1988: 図版 2.2]、聞喜県上郭村（図 9.8）[山西省考古研究所 1994:129 頁 図 13.1] で出土している。

C 型：平面形が長方形か楕円形を成すもの（図 9.9-23）。中原風の紋様がないものを Ca 型、中原風の紋様が見られるものを Cb 型とする。Ca 型の資料としてとして、志丹県張渠郷（図 9.9）[姫 1989: 封三.5]、西安市紡織四廠廠区（図 9.10）[王 1991:7 頁 図 1.7]、西安市紡織城（図 9.11）[西安市文物保護考古所 2005:36 頁 No. 35]、陝西歴史博物館所蔵黄陵県寨頭村出土品（図 9.12）[筆者撮影]、原平県練家溝（図 9.13）[忻州地区文物管理处他 1992:109 頁 図 2]、綏徳県城開鎮（図 9.14）[曹他 2009:325 頁]、安塞県高橋郷井溝村（図 9.15）[曹他 2009:329 頁]、延安市宝塔区刑警隊移交品（図 9.16）[曹瑋他 2009:331 頁]、延長県羅子山郷上西渠村（図 9.17）[曹瑋他 2009:327 頁]、神木県城関鎮（図 9.18）[曹瑋 2009:321 頁]、綏徳県南関鎮供銷社（図 9.19）[曹瑋他 2009:323 頁] を挙げる。Cb 型として原平市塔梁崗（図 9.20）[忻州地区文物管理处他 1998:11 頁 図 10.1]、渾源県李峪（図 9.21）[山西省考古研究所 1983:697 頁 図 2.1]、原平市塔梁崗 3 号墓（図 9.22）[山西忻州地区文物管理处 1986:23 頁 図 5]、准格爾旗宝亥公社（図 9.23）[伊克昭盟文物工作端 1987:82 頁 図 3.1] を挙げる。

D 型：平面形は円形で、器体がほとんど球形を呈する型式（図 7.24-34）³⁾。完全な球形に近いものを Da 型に、上下がやや平たいものを Db 型に分ける³⁾。Da 型は神木県橋岔灘（図 9.24）[盧 1988: 図版 4.3]、靖辺県小圈荘（図 9.25）[曹他 2009:287 頁]、黄陵県寨頭河（図 9.26）[曹他 2009:289 頁] で出土している。Db 型は、甘子堡 8 号墓（図 9.27）[賀・劉 1993: 図版 2.2]、玉皇廟 18 号墓（図 9.28）[北京市文物研究所 2007:912 頁 図 572.1]、玉皇廟 250 号墓（図 9.29）[北京市文物研究所 2007:912 頁 図 572.2]、行唐県李家荘（図 9.30）[河北省博物館他 1980:89 頁 No. 160]、唐県釣魚台（図 9.31）[胡・冀 2007:7 頁 図 10]、順平県壇山（図 9.32）[保定市文物管理所 2002:44 図 2.1]、沁水県桃花溝（図 9.33）[李 2000:293 頁 図 9.4]、北辛堡 1 号墓（図 9.34）[河北省博物館他 1980:84 頁



※縮尺不同 ※12 は筆者撮影

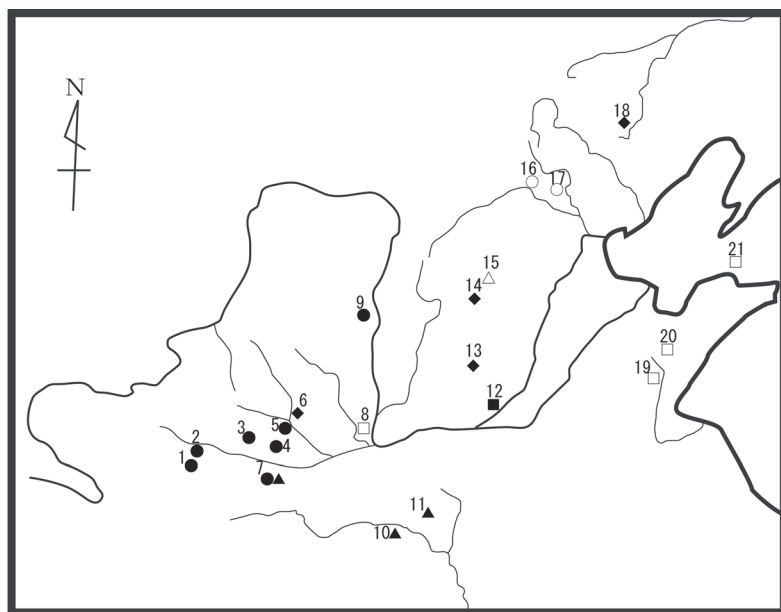
図 9. 鍔分類図

No. 153] で出土している。

年代についても高濱の研究に従う〔高濱 2011:72-73 頁〕。つまり、A 型が西周中期から後期、B 型が春秋前期から中期、C 型が春秋中期から後期、D 型は C 型とほぼ同時期かやや C 型よりも下の時期とする。

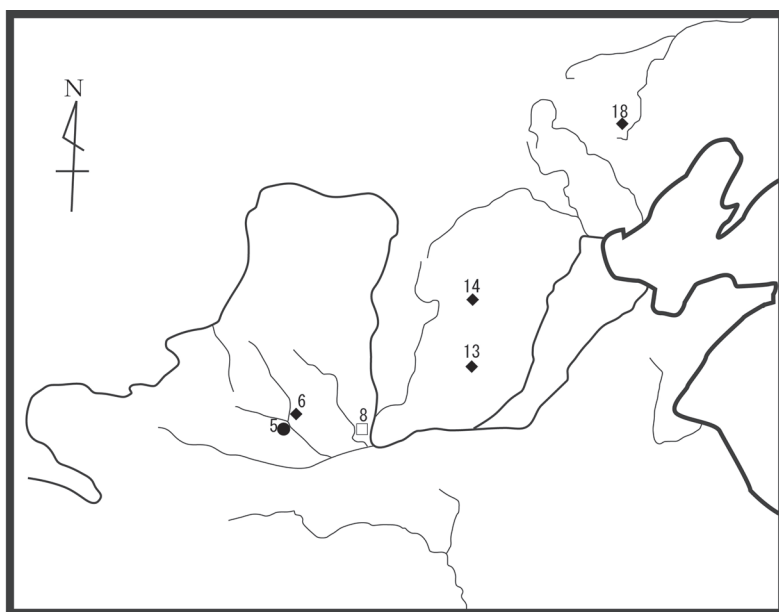
次に鍔と短剣の拡がりを見ていく。すでに高濱が指摘しているように、両者の古い型式は渭水流

域から出土しており（図 11、図 13）、鍔は出土地に沿って河北、燕山地域へと伝わったことが見て取れる（図 13）〔高濱秀 2011:72-73 頁〕。そして玉皇廟 18 号墓、甘子堡 8 号墓で Db 型の鍔とⅢ a1 型の短剣が共伴している（図 1. 37, 40, 図 9. 28, 27）。以上の点から鍔と獣面型の短剣が同時期に陝西省北部、河北省北部を經由し、渭水流域より燕山地域に



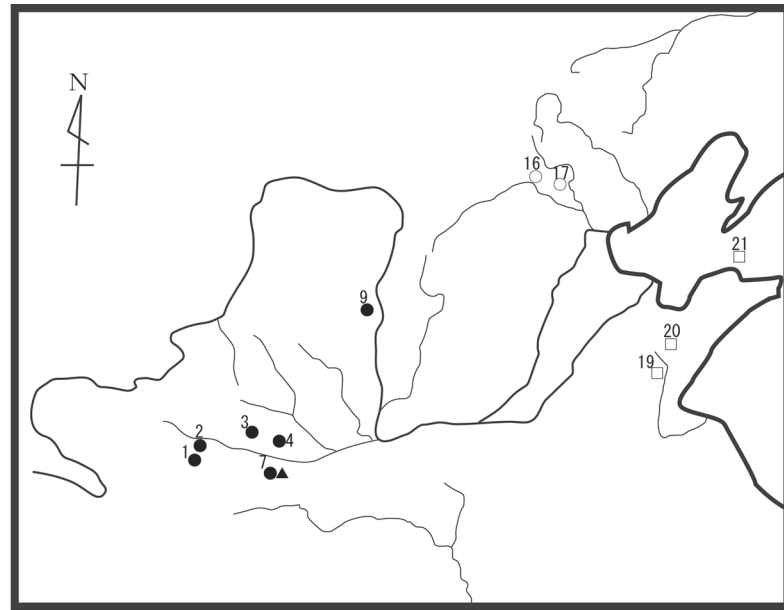
◆ I 型 ● II 型 ○ III 型 ▲ IV 型 △ V 型 ■ VI 型 □ VII 型

図 10. 短剣分布図 1 圓頂山, 大堡子山 2 毛家坪 3 隴泉 4 八旗屯, 孫家南頭村
5 景家莊 6 宇村 7 譚家村, 益門村 8 韓城 9 米脂県 10 喬家院墓地
11 浙川下寺 12 琉璃閣 13 黎国墓地 14 昔陽大寨 15 靈寿城 16 甘子堡墓地
17 玉皇廟墓地・西梁堖墓地・葫蘆溝墓地 18 南山根 19 劉家店子 20 東古廟村 21 大竹山島



◆ I 型 ● II 型 ○ III 型 ▲ IV 型 △ V 型 ■ VI 型 □ VII 型

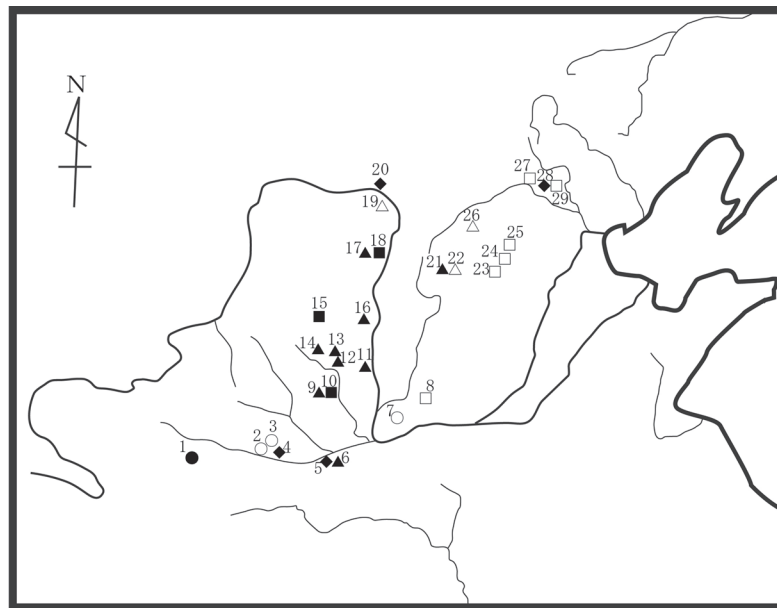
図 11. 西周後期から春秋前期の短剣分布図 5 景家莊 6 宇村
8 韓城 13 黎国墓地 14 昔陽大寨 18 南山根 ※図版番号は図 10 に準拠



◆ I 型 ● II 型 ○ III 型 ▲ IV 型 △ V 型 ■ VI 型 □ VII 型

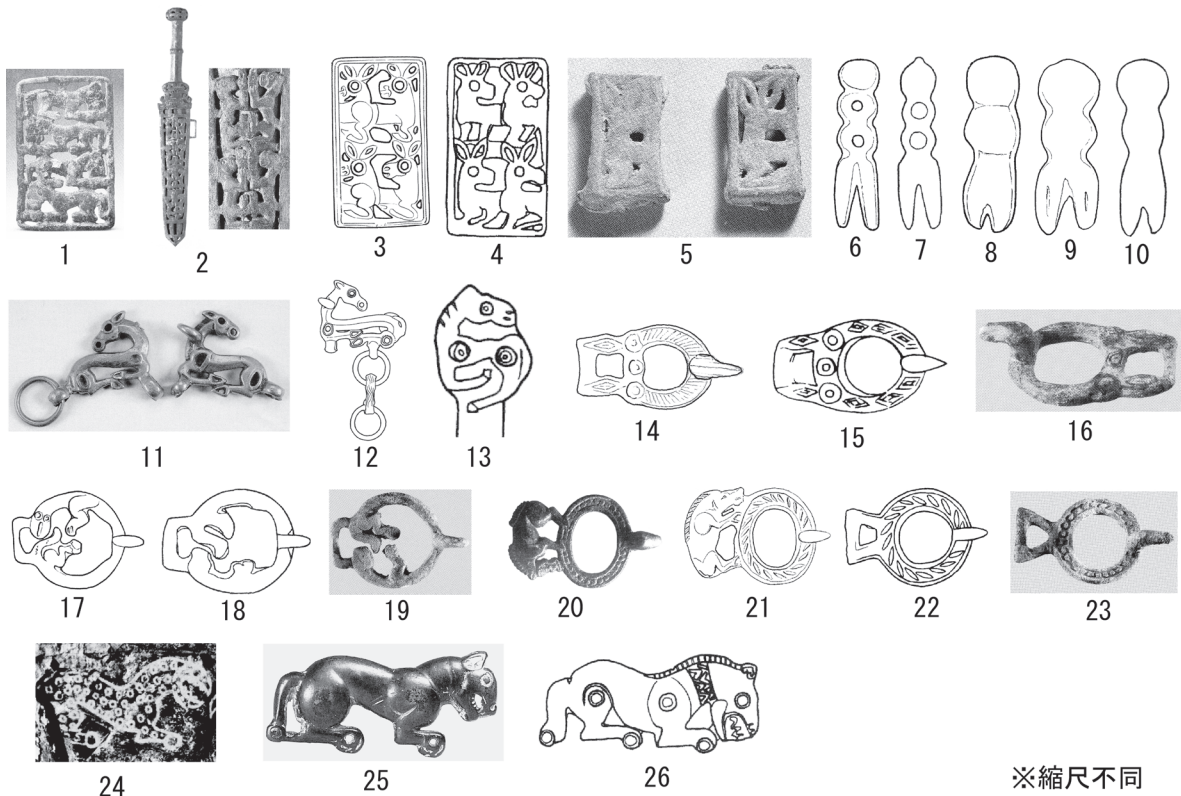
図 12. 春秋中期の短剣分布図 1 圓頂山, 大堡子山 2 毛家坪 3 隴泉 4 八旗屯, 孫家南頭村
7 譚家村 9 米脂県 16 甘子堡墓地 17 玉皇廟墓地・西梁堖墓地・葫蘆溝墓地 19 劉家店子
20 東古廟村 21 大竹山島

※図版番号は図 10 に準拠



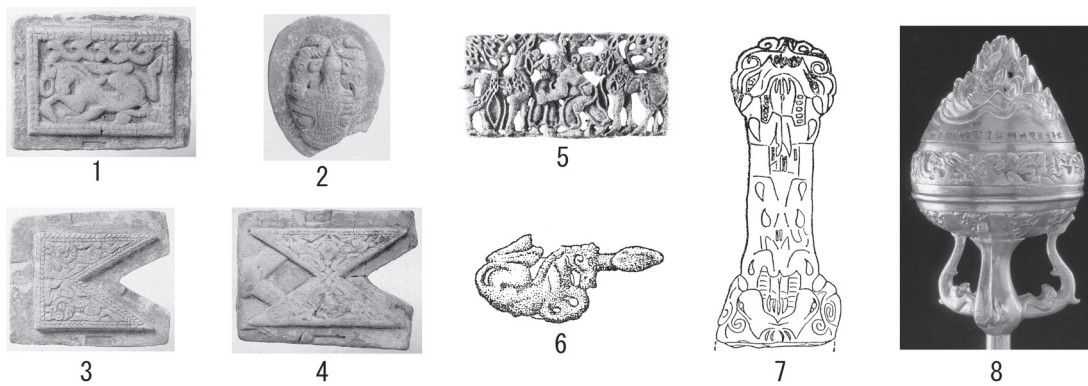
◆ A 型 ● Ba 型 ○ Bb 型 ▲ Ca 型 △ Cb 型 ■ Da 型 □ Db 型

図 13. 鍔分布図 1 礼県 2 宝鶏県甘峪 3 鳳翔県雍城遺跡 4 岐山県王家村 5 北郊范家寨
6 西安市紡織四廠廠区 7 閿喜県上郭村 8 沁水県桃花溝 9 黄陵県寨頭村 10 黄陵県寨頭河
11 延長県上西渠村 12 延安県宝塔区 13 安塞県井溝村 14 志丹県張渠郷 15 靖辺県小圪村
16 綏徳県城関鎮 17 神木県城関鎮 18 神木県橋岔灘 19 准格爾旗宝亥公社 20 包頭市麻池古城
21 原平県練家溝 22 塔梁崗・塔梁崗 3 号墓 23 行唐県李家莊 24 唐県釣魚台 25 順平県壇山
26 輝源県李峪 27 甘子堡墓地・北辛堡墓地 28 西撥子村 29 玉皇廟墓地



※縮尺不同

図 14. 関連資料 4 1 陝西省綏徳県 2 東アジア博物館所蔵剣と鞘拵大図 3 榆林市文管會轉交品
4 忻州窑子墓地 59 号墓 5 甘子堡墓地 6 陝西省榆林市東奔灘村 1 7 玉皇廟 382 号墓
8 陝西省榆林市東奔灘村 2 9 陝西省榆林市東奔灘村 3 10 玉皇廟 350 号墓 11 陝西省横山県
12 陝西省志丹県碾樹坪村 13 玉皇廟 44 号墓 14 陝西省綏徳県三角坪村 15 甘子堡 14 号墓
16 玉皇廟 5 号墓 17 陝西省綏徳県公安局移交品 18 和林格爾新店子 13 号墓 19 玉皇廟 261 号墓
20 西安市 21 陝西省綏徳県供銷社聯合社廢品收購端揀選品 22 和林格爾新店子 20 号墓
23 玉皇廟 13 号墓 24 毛家坪 201 号車馬坑 25 サックラー・コレクション 26 玉皇廟 236 号墓



※縮尺不同

図 15. 戦国時代以降の関連遺物

1 楽百氏 34 号墓 1 2 楽百氏 34 号墓 2 3 楽百氏 34 号墓 3 4 楽百氏 34 号墓 4
5 客省荘 140 号墓 6 鬪鷄台 G5 墓 7 南干河村 8 茂陵

伝わったと言える。そして燕山地域で出土する北方系青銅器が(図14.5, 7, 10, 13, 15, 16, 19, 23)[中國青銅器全集編輯委員會1995b:104頁 No.151, 北京市文物研究所2007:1213頁 図713.2, 1, 1204頁 図706.2, 賀・劉1993:33頁 図13.9, 北京市文物研究所2007:図版368.3, 4, 2]、陝西省北部を中心とした地域でも出土、収集されていることから、燕山地域より渭水流域へも文化が伝播したと言える(図14.3, 4, 6, 8, 9, 11, 12, 14, 17, 18, 20-22)[曹他2009:914頁 榆陽89, 内蒙古文物考古研究所2009b:41頁 図14.11, 曹他2009:906頁 榆林217-3, 905頁 榆林217-1, 906頁 榆林217-2, 申編2003:131頁 No.144, 曹他2009:887頁 延安220, 898頁 綏徳211-2, 903頁 綏徳580-1, 内蒙古文物考古研究所2009a:7頁 図6.1, 西安市文物保護考古所2005:191頁 No.248, 曹他2009:902頁 綏徳375-3, 内蒙古文物考古研究所2009a:7頁 図6.10]。中でも鞘Ⅱ型と同じモチーフの飾板が陝西省綏徳県で収集されている(図14.1, 2)[曹他2009:915頁 陝歴博七四537, 東京国立博物館1997:65頁 No.111]。またⅡc型を出土する毛家坪遺跡で、201号車馬坑の2号車輿板に見られる漆の彩色がサックラー・コレクション、玉皇廟236号墓出品と類似することからも同様のことが言える(図14.24-26)[梁・侯2014:61頁 右下, E.C.Bunker 1997:188頁 No.111, 北京市文物研究所2007:1180頁 図692.8]。

ただし鍔と短剣の間には、渭水流域と燕山地域以外には分布がなぜ重ならないのか、という問題がある(図10, 図13)。鍔が河南省や山東省、湖北省で出土しない理由として、筆者はこれらの地域の中原系文化では、青銅礼器を用いた葬送儀礼が確立しており、異民族が使用している青銅容器を受け入れられなかったのではないかと推測する。この考えは春秋時代から戦国時代に地域を超え、共有された規範に基づいて祭祀が行われていたとする小澤の研究とも整合する[小澤2005:230]。

一方で短剣が河南省、山東省、湖北省に伝わった理由として、渭水流域が周から春秋にかけて強い影響力を持っていた点、獣面型の短剣や鞘の中には金や銀、玉が使われたものがあり(図1.15, 16, 21, 27, 31, 図2.13, 17-19, 22-24, 27, 28, 33)、短剣が装飾品としての側面ももっていた点が挙げられる。陝西省北部で短剣

が出土しない点については、この地域における鍔の詳細な発掘報告が少なく、はっきりしたことは不明だが⁴⁾、上記の事柄が組み合わさり、鍔と短剣の分布に違いが出たのではないかと考える。

VII 小結

以上、西周後期から前漢時代にかけての獣面型短剣の編年について考察を行った。渭水流域で獣面型の祖型が造られ、その後北方系文化とのつながりの中で、発展し出土地域を拡げていく過程を明らかにした。特に春秋中期は渭水流域から陝西省北部の地域と、燕山地域の密接な関係が見て取れたが、両地域ともに戦国時代になると短剣の出土は見られなくなる。この時代は燕山地域の北方系文化が衰退する時代であり、渭水流域では戦国時代中期に青銅器、土器が大きく転換し、新たな埋葬習俗として洞室墓が出現する[岡村1985:62-64頁]。その背景として岡村は西北辺境地帯との接触が関係していると考察している。このことを肯定するように戦国時代後期以降、内蒙古中南部や寧夏、甘肅地域の北方系文化と関連のある遺物が渭水流域で出土ようになる(図15.1-8)[陝西省考古研究所2006:彩版一.2, 彩版三.1, 彩版二.1, 2, 中国科学院考古研究所1962:図版103.5, 蘇秉琦1948:236頁 図94.3, 閻1989:1046頁 図2.6, 陝西歴史博物館2008:67頁]。これらが個別の事象ではないとしたら、渭水流域における社会変化と北方系文化の盛衰がどのように関連しているのかが今後の課題と言える。

謝辞

この度、佐々木達夫先生が古稀を迎えられたことを心よりお慶び申し上げます。先生には研究室に在籍中、多くのご指導を賜りました。このような記念すべき紀要に論文を執筆させていただいたことを、深く感謝いたします。また論文の執筆に際し、高濱秀先生、足立拓朗先生、東京国立博物館の川村佳男様には大変お世話になりました。筆末ではありますがお礼申し上げます。

註

- 1) 陳洪は関中地域出土の青銅器、土器編年についての研究で、圓頂山、大堡子山の年代を春秋前期と捉えており[陳2004:47頁 表6]、Ⅱa2型の年代は春秋前期まで遡る可能性ももっている。
- 2) TNM Image Archives No.E0053813, No.E0053815の画

像資料の使用については、株式会社 DNP アートコミュニケーションの許可が必要であり、許可なく資料を複製することは禁止されていることを明記しておく。また本稿で使用した画像は No. E0053813、No. E0053815 の画像を部分的にトリミングしたものである。

- 3) 高濱秀の分類の中では、Db 型の中に甘肅省武威市張義鎮で出土した鍔も含まれているが〔賈・李 2011:89 頁図 1, 高濱秀 2011:25 頁〕、他の Db 型の鍔とどのような関係をもっているか不明であるため、本稿では扱わない。
- 4) 陝西省寨頭河墓地 48 号墓で、土製の Ca 型鍔が出土している〔陝西省考古研究院他 2012: 図版 3.6〕。今後この墓地についての正式な報告書が出れば、春秋時代における陝西省北部の様相を理解する端緒となるかもしれない。

引用文献

和文・中文

- 安丘市博物館 2012 「山東安丘柘山鎮東古廟村春秋墓」『文物』2012-7, 16-21 頁, 35 頁。
- 伊克昭盟文物工作隊 1987 「内蒙古准格爾旗宝亥社發現青銅器」『文物』1987-12, 81-83 頁。
- 伊克昭盟文物工作隊・内蒙古文物工作隊 1980 「西溝畔匈奴墓」『文物』1980-7, 1-10 頁。
- 梅原末治 1934 「最近出現の鞘のある北方系銅劍」『古代北方系文物の研究』1938, 138-150 頁。
- 江上波夫・水野清一 1935 『内蒙古・長城地帯』東方考古学叢刊 乙種第一冊。
- 閻金安 1989 「陝西鳳翔南干河出土戰国、漢代窖藏青銅器」『考古』1989-11 1045, -1047 頁, 1044 頁。
- 王振華 1993 『商周青銅兵器』台北。
- 黄翠梅・李建緯 2007 「金玉同盟」『中原文物』2007-1, 42-58 頁。
- 王占奎・水涛 1997 「甘肅合水九端遺址發掘報告」『考古学研究(三)』科学出版社, 300-460 頁。
- 王長啓 1991 「西安市文管會藏鄂爾多斯式青銅器及其特征」『考古与文物』1991-4, 6-11 頁。
- 王峰 1990 「河北興隆縣發現商周青銅器窖藏」『文物』1990-11, 57-58 頁。
- 岡村秀典 1985 「秦文化の編年」『古史春秋』1985-2, 53-74 頁。
- 小田木治太郎 2005 「北方系長方形帶飾板の展開 - 西安北郊秦墓出土鑄型の分析から -」『中国考古学』第五号, 79-94 頁。
- 小澤正人 2005 「東周時代青銅器の地域性とその背景」『中国考古学』第五号, 209-236 頁。
- 鄂爾多斯博物館 2006 『鄂爾多斯青銅器』文物出版社。
- 盖山林 1986 「准格爾旗速机溝出土的青銅器」『鄂爾多斯式青銅器』文物出版社, 372-374 頁。
- 賈建威・李永平 2011 「甘肅武威出土銅鍔」『文物』2010-5, 89-90 頁。
- 河南博物院・台北國立歷史博物館 2003 『輝縣琉璃閣甲乙二墓』文物出版社。
- 河北省博物館・文物管理处 1977 「河北平泉東南溝夏家店上層文化墓葬」『考古』1977-1, 51-55 頁。
- 河北省博物館・文物管理处 1980 『河北省出土文物選集』文物出版社。
- 河北省文物研究所 2005 『戰国中山国靈寿城』文物出版社
- 賀勇・劉建中 1993 「河北懷來甘子堡發現的春秋墓群」『文物春秋』1993-2, 23-40 頁, 75 頁。
- 甘肅省文物考古研究所 礼県博物館 2002 「礼県圓頂山春秋秦墓」『文物』2002-2, 4-30 頁。
- 甘肅省文物考古研究所・礼県博物館 2005 「甘肅礼県圓頂山 98LDM2、2000LDM4 春秋秦墓」『文物』2005-2, 4-27 頁。
- 姬乃軍 1989 「延安地区文管會收藏的匈奴文物」『文博』1989-4 72-73 頁。
- 許俊臣・劉得禎 1985 「甘肅寧縣宇村出土西周青銅器」『考古』1985-4, 349-352 頁。
- 忻州地区文物管理处・李有成 1992 「原平縣練家崗戰国青銅器」『山西省考古学論文集』1, 107-109 頁。
- 忻州地区文物管理处・原平市博物館 1998 「山西原平劉庄塔崗梁東周墓第二次清理簡報」『文物季刊』1998-1, 3-13 頁。
- 建平縣文化館・朝陽地区博物館 「遼寧建平縣的青銅時代墓葬及相關遺物」『考古』1983-8, 679-694 頁, 713 頁。
- 胡金華・冀艷坤 2007 「河北唐縣釣魚台積石墓出土文物整理簡報」『中原文物』2007-6, 4-9 頁。
- 高次若・王桂枝 1988 「宝鶏縣甘峪發現一座春秋早期墓葬」『文博』1988-4, 21 頁。
- 國立故宮博物院編輯委員會編 1995 『故宮青銅兵器圖録』國立故宮博物館。
- 湖北省文物考古研究所・湖北省文物局南水北調為公室 2008 「湖北鄖縣喬家院春秋殉人墓」『考古』2008-4, 28-50 頁。
- 蔡慶良・孫秉君 2007 『芮国金玉選粹』三秦出版社。
- 山西忻州地区文物管理处 1986 「原平縣劉庄塔崗梁東周墓」『文物』1986-11, 21-26 頁。
- 山西省考古研究所 1983 「山西渾源縣李峪村東周墓」『考古』1983-8, 695-700 頁。
- 山西省考古研究所 1994 「1976 年聞喜上郭村周代墓葬清理

- 記』『三晋考古』第一輯, 123-138 頁.
- 山東省文物考古研究所・沂水県文物管理端 1984「山東沂水劉家店子春秋墓発掘簡報」『文物』1984-9, 1-10 頁.
- 祝中熹・李永平 2004『青銅器』敦煌文芸出版社.
- 肖琦 1991「隴県出土の匈奴文物」『文博』1991-5, 79-81 頁, 88 頁.
- 邵国田 1993「内蒙古敖漢旗発現の青銅器及有関遺物」『北方文物』1993-1, 18-25 頁.
- 邵国田編 2004『敖漢文物精華』内蒙古文化出版社.
- 申秦雁編 2003『金銀器』陝西人民美術出版社.
- 西安市文物保護考古所 2005『西安文物精華 青銅器』世界図書出版.
- 陝西省考古研究院 2009『少陵原西周墓』科学出版社.
- 陝西省考古研究院・宝鶏市考古工作隊・鳳翔県博物館 2013「陝西鳳翔孫家南頭春秋秦墓発掘簡報」『考古与文物』2013-4, 3-34 頁, 53 頁.
- 陝西省考古研究院・延安市文物研究所・黄陵県旅遊文物局 2012「陝西黄陵寨頭河戦国戎人墓地発掘簡報」『考古与文物』2012-6, 3-10 頁.
- 陝西省考古研究所 2006『西安北郊秦墓』三秦出版社.
- 陝西省雍城考古隊 1984「一九八二年鳳翔雍城秦漢遺址調査簡報」『考古与文物』1984-2, 23-31 頁.
- 陝西省雍城考古工作隊・吴鎮烽・尚志儒 1980「陝西鳳翔八旗屯秦国墓葬発掘簡報」『文物資料叢刊』3 67-85 頁.
- 陝西歴史博物館編 2008『陝西古代文明』陝西人民出版社.
- 早期秦文化聯合考古隊 2008「2006 年甘肅礼県大堡子山東周墓葬発掘簡報」『文物』2008-11, 30-49 頁.
- 曹璋・陝西考古研究院編 2009『陝北出土青銅器』巴蜀出版社.
- 蘇秉琦 1948『鬬雞臺溝東區墓葬』名古屋.
- 代麗鵬 2011「早期玉劍具研究」『文物』2011-4, 84-91 頁.
- 高濱秀 1982「オルドス青銅短劍の型式分類」『東京国立博物館紀要』第 18 号, 95-131 頁.
- 高濱秀 1999「大興安嶺からアルタイまで」『中央ユーラシアの考古学』同成社, 53-136 頁.
- 高濱秀 2011「中国の鍔」『鍔の研究』雄山閣, 9-93 頁.
- 高濱秀・岡村秀典編 2000『世界美術大全集 東洋編 第 1 卷 先史・殷・周』小学館.
- 中國玉器全集編輯委員會 1993『中國玉器全集』3 河北美術出版社.
- 中国科学院考古研究所 1962『禮西発掘報告』文物出版社.
- 中国社会科学院考古研究所・河北省文物管理处 1980『滿城漢墓発掘報告』文物出版社.
- 中國青銅器全集編輯委員會 1995a『中国青銅器全集 8』文物出版社.
- 中國青銅器全集編輯委員會 1997『中国青銅器全集 9』文物出版社.
- 中國青銅器全集編輯委員會 1995b『中国青銅器全集 15』文物出版社.
- 中國文物精華編輯委員會編 1992『中國文物精華』文物出版社.
- 中國内蒙古文物考古研究所・韓國東北亞歴史財團 2007『夏家店上層文化的青銅器』韓国東北亞歴史財団.
- 張崇寧「山西黎城 黎国墓地」『国家重要考古発現 2007』2008, 40-45 頁.
- 張天恩 1993「秦器三論一益門春秋墓几个問題淺談」『文物』1993-10, 20-27 頁.
- 張天恩 1994「再論秦式短劍」『秦文化論叢』第三輯, 431-458 頁.
- 陳洪 2004「関中地域における秦墓出土青銅器・土器編年の再検討」『東アジアと日本』25-51 頁.
- 陳瑞麗 1967「戦国時代的一把包金劍」『歴史語言研究所集刊』第三十七本, 1967, 中央研究院, 221-235 頁.
- 鶴間和幸監修 2004『大兵馬展』産経新聞社.
- 鄭紹宗 1984「中国北方青銅短劍の分期及形制研究」『文物』1984-2, 37-49 頁.
- 田広金・郭素新 1980「内蒙古阿魯柴登発現の匈奴遺物」『考古』1980-4, 333-338 頁, 364 頁.
- 田広金・郭素新 1986『鄂爾多斯式青銅器』文物出版社.
- 東京国立博物館 1997『大草原の騎馬民族ー中国北方の青銅器ー』.
- 東京国立博物館 2005『中国北方系青銅器』竹林舎.
- 内蒙古自治区文物考古研究所 2004『内蒙古地区鮮卑墓葬の発現与研究』科学出版社.
- 中國内蒙古文物考古研究所, 韓國東北亞歴史財團編 2007『夏家店上層文化的青銅器』.
- 内蒙古文物考古研究所 2009a「内蒙古和林格爾県新店子墓地発掘簡報」『考古』2009-3, 3-14 頁.
- 内蒙古文物考古研究所 2009b「内蒙古凉城県忻州窑子墓地発掘簡報」『考古』2009-3, 28-48 頁.
- 内蒙古自治区文物考古研究所・寧城県遼中京博物館 2009『小黒石溝一夏家店上層文化遺址発掘報告』科学出版社.
- 寧夏固原博物館編 2004『固原歴史文物』科学出版社.
- 寧城県文化館・中国社会科学院研究生院考古系東北考古專業 1985「寧城県新発現の夏家店上層文化墓葬及其相關遺物的研究」『文物資料叢刊』9, 23-53 頁.
- 畠山禎 1992「北アジアの鹿石」『古文化談叢』第 27 集,

- 九州古文化研究会, 207-225 頁.
- 林巳奈夫 1984『殷周時代青銅器の研究 殷周青銅器綜覧一』吉川弘文館.
- 林巳奈夫 1999『中国古玉器総説』吉川弘文館.
- 北京市文物管理处 1976「北京地区の又一重要考古收穫」『考古』1976-4, 246-258 頁, 228 頁.
- 北京市文物管理处 1979「北京市延慶県西撥子村窖藏銅器」『考古』1979-3, 227-230 頁.
- 北京市文物研究所 2007『軍都山墓地 玉皇廟』文物出版社.
- 北京市文物研究所 2009『軍都山墓地 葫蘆溝与西梁坑』文物出版社.
- 宝鶏市考古工作隊 1991「宝鶏譚家村春秋及唐代墓」『考古』1991-5, 392-399 頁.
- 宝鶏市考古工作隊 1993「宝鶏市益門村二号春秋墓發掘簡報」『文物』1993-10, 1-14 頁.
- 宝鶏市博物館・宝鶏県図博館 1980「宝鶏県西高泉村春秋秦墓發掘記」『文物』1980-9, 1-6 頁.
- 鳳翔県博物館編 2012『鳳翔遺珍』三秦出版社.
- 保定市文物管理所 2002「河北順平県壘山戦国墓」『文物春秋』2002-4, 43-45 頁.
- 八木聡 2012「春秋時代における獣面型短剣の編年研究」『金沢大学考古学紀要』vol. 33, 55-62 頁.
- 八木聡 2014「中国北方系青銅短剣の編年と地域間交流」『ユーラシアの考古学』六一書房 129-143 頁.
- 楊建華 2004『春秋戦国時期中国北方文化帶的形成』文物出版社.
- 楊建華 2013「略論秦文化与北方文化的關係」『考古与文物』2013-1, 45-51 頁.
- 楊鉄男 1997「朝陽市博物館收藏的一件青銅短剣」『文物』1997-10, 89 頁.
- 李繼紅 2000「沁水県出土の春秋戦国青銅器」『山西省考古学会論文集』3, 288-294 頁.
- 李永平 2000「甘肅省博物館系統所藏青銅器選介」『文物』2000-12, 69-71 頁、背表紙裏.
- 李步青・林仙庭 1992「山東省長島県出土一批青銅器」『文物』1992-2, 95-96 頁.
- 劉雲輝 2006『陝西出土東周玉器』文物出版社・衆志美術出版社.
- 劉得禎・朱建唐 1981「甘肅靈台県景家莊春秋墓」『考古』1981, 298-301 頁.
- 梁雲・侯紅偉 2014「甘肅甘谷毛家坪遺址 2013 年考古收穫」『2013 中国重要考古發現』60-63 頁.
- 遼寧省昭烏達盟文物工作隊・中国社会科学院考古研究所東北工作隊 1973「寧城県南山根の石椁墓」『考古学報』1973-2, 27-39 頁.
- 礼県博物館・礼県秦西垂文化研究会 2004『秦西垂陵区』文物出版社.
- 盧桂蘭 1988「榆林地区收藏的部分匈奴文物」『文博』1988-6, 16-19 頁.
- 龐文龍・崔玫英 1989「岐山王家村出土青銅器」『文博』1989-1, 91-92 頁.
- 盧達成・胡智生 1988『宝鶏潁国墓地』文物出版社.
- 英文**
- Bunker, E.C. et al.1997 *Ancient bronzes of the eastern eurasian steppes from the arthur M.Sackler Collection*, New York.
- Bunker, E.C. et al.2002 *Nomadic art of the Eastern Eurasian Steppes The Eugene V. Thaw and other New York Collections*. The Metropolitan Museum of Art, New York
- Yale University Press, New Haven and London.
- Loehr, M. 1949 *Ordos daggers and knives: new material, classification and chronology*. first part: daggers. *Artibus Asiae* vol.XII:23-83.
- Loehr, M. 1956 *Chinese Bronze Age Weapons*, London.
- So, J. F. et al 1995 *Eastern Zhou Ritual Bronzes from the Arthur M.Sackler Collections*, New York
- So, J. F. and Bunker, E, C 1995 *Traders and Raiders on China's Northern Frontier*, Seattle and London
- Takahama, Shu et al.2006 Preliminary Report of the Archaeological Investigations in Ulaan Uushig I(Uushigiin Övör) in Mongolia, *Archaeological Bulletin Kanazawa University* vol.28, 61-102.
- Whitfield, R. 1993 *The Problem of Meaning in Early Chinese Ritual Bronzes*, London
- その他**
- TNM Image Archives No.E0053813
- TNM Image Archives No E0053815
- 図版出典**
- 図 1:1 張 2008, 2 許・劉 1985, 3 中国内蒙古文物考古研究所他 2007, 4 中国青銅器全集編輯委員會 1995a, 5 M. Loehr 1949, 6 王 1993, 7 J. F. So and E. C. Bunker 1995, 8 東京国立博物館 2005, 9-11 礼県博物館他 2004, 12 早期秦文化聯合考古隊 2008, 13 陝西省雍城考古工作隊他 1980, 14 東京国立博物館 1997, 15 張天恩 1994, 16 甘肅省文物考古研究所他 2005, 17 宝鶏市考古工作隊 1991, 18 肖 1991, 19 曹他 2009, 20 陝西省考古研究院他 2013, 21 東京国立博物館 1997, 22-23 M. Loehr 1949, 24 田・郭 1986, 25 J. F. So and E. C. Bunker 1995, 26 東京国立博物館 1997, 27 鶴間監修

2004, 28 王 1993, 29 鳳翔県博物館 2012, 30 梁・侯 2014, 31 E. C. Bunker et al. 2002, 32 東京国立博物館 2005, 33 劉・朱 1981, 34 J. F. So and E. C. Bunker 1995, 35 礼県博物館 他 2004, 36-39 北京市文物研究所 2007, 40 賀・劉 1993, 41 M. Loehr 1956, 42 北京市文物研究所 2009

図 2:1-6 北京市文物研究所 2007, 7 北京市文物研究所 2009, 8 東京国立博物館 2005, 9 M. Loehr 1956, 10 北京市文物研究所 2007, 11 賀・劉 1993, 12 代 2011, 13 宝鶏市考古工作隊 1993, 14 西安市文物保護考古所 2005, 15 王 1993, 16 國立故宮博物院編輯委員會編 1995, 17 湖北省文物考古研究所 他 2008, 18 中國玉器全集編輯委員會 1993, 19 J. F. So et al. 1995, 20 河北省文物研究所 2005, 21 東京国立博物館 1997, 22 陳 1967, 23 河南博物院 他 2003, 24 山東省文物考古研究所 他 1984, 25 安丘市博物館 2012, 26 李・林 1992, 27-28 蔡・孫 2007, 29 王 1993, 30 M. Loehr 1949, 梅原 1934, 32 東京国立博物館 1997, 33 R. Whitfield 1993

図 3:1 張 2008, 2 中国内モンゴル文物考古研究所 他 2007, 3 J. F. So and E. C. Bunker 1995, 4 劉・朱 1981, 5 王 1993, 6-7 蔡・孫 2007, 8 礼県博物館 他 2004, 9 甘肅省文物考古研究所 他 2005, 10 王 1993, 11 礼県博物館 他 2004, 12-13 北京市文物研究所 2007, 14 賀・劉 1993, 15 山東省文物考古研究所 他 1984, 16 安丘市博物館 2012, 17 東京国立博物館 1997, 18 張 1994, 19 鶴間監修 2004, 20 代 2011, 21 西安市文物保護考古所 2005, 22 北京市文物研究所 2009, 23 北京市文物研究所 2007, 24 河北省文物研究所 2005, 25 陳 1967, 26 河南博物院 他 2003, 27 R. Whitfield 1993

図 4:1 中國文物精華編輯委員會 1992, 2 J. F. So and E. C. Bunker 1995, 3 東京国立博物館 2005, 4 中國青銅器全集編輯委員會 1995b, 5 E. C. Bunker et al. 1997, 6 中國青銅器全集編輯委員會 1997, 7 E. C. Bunker et al. 1997, 8 鄭紹宗 1984, 9 TNM Image Archives No. E0053813, 10 黄・李 2007, 11 TNM Image Archives No. E0053815, 12 河南博物院 他 2003

図 5:1-4 劉 2006, 5 東京国立博物館 1997, 6 陝西歴史博物館編 2008, 7 陝西省雍城考古工作隊 他 1980, 8 代 2011

図 6:1-2 中国社会科学院考古研究所 他 1980, 3-4 盖 1986, 5 高濱・岡村編 2000, 6 伊克昭盟文物工作端 他 1980, 7 中国社会科学院考古研究所 他 1980, 8 高濱・岡村編 2000, 9 伊克昭盟文物工作端 他 1980, 10 中國青銅器全集編輯委員會 1995b, 11 田・郭 1980

図 7:1-2 陝西省考古研究所 2009, 3-8 北京市文物管理

処 1976, 9 王峰 1990, 10 建平県文化館 他 1983, 11 王・水 1997, 12 邵 2004, 13 祝・李 2004, 14-17 中国内モンゴル文物考古研究所 他 2006, 18 遼寧省昭烏達盟文物工作端 1973, 19 内蒙古自治区文物考古研究所 他 2009, 20 寧城県文化館 他 1985, 21-22 鄭 1984, 23 内蒙古自治区文物考古研究所 他 2009, 24 楊鉄男 1997, 25 河北省博物館 1977, 26 内蒙古自治区文物考古研究所 他 2009, 27 寧城県文化館 他 1985, 28-29 西安市文物保護考古所 2005, 30 河北省博物館 他 1980, 31 邵 1993, 32 西安市文物保護考古所 2005, 33 鄂爾多斯博物館 2006, 34 筆者撮影, 35 宝鶏市博物館 他 1980, 36 寧夏固原博物館 2004, 37 東京国立博物館 1997, 38 寧城県文化館 1985, 39 東京国立博物館 2005, 40 中国内モンゴル文物考古研究所 他 2006

図 8:1 盧・胡 1988, 2-6 Takahama Shu et al. 2006

図 9:1 北京市文物管理处 1979, 2 西安市文物保護考古所 2005, 3 内蒙古自治区文物考古研究所 2004, 4 龐 他 1989, 5 李 2000, 6 陝西省雍城考古隊 1984, 7 高・王 1988, 8 山西省考古研究所 1994, 9 姬 1989, 10 王 1991, 11 西安市文物保護考古所 2005, 12 筆者撮影, 13 忻州地区文物管理处 他 1992, 14-19 曹 他 2009, 20 忻州地区文物管理处 他 1998, 21 山西省考古研究所 1983, 22 山西忻州地区文物管理处 1986, 23 伊克昭盟文物工作端 1987, 24 盧 1988, 25-26 曹 他 2009, 27 賀・劉 1993, 28-29 北京市文物研究所 2007, 30 河北省博物館 他 1980, 31 胡・冀 2007, 32 保定市文物管理所 2002, 33 李 2000, 34 河北省博物館 他 1980

図 10: 筆者作成

図 11: 筆者作成

図 12: 筆者作成

図 13: 筆者作成

図 14:1 曹 他 2009, 2 東京国立博物館 1997, 3 曹 他 2009, 4 内蒙古文物考古研究所 2009b, 5 中國青銅器全集編輯委員會 1995b, 6 曹 他 2009, 7 北京市文物研究所 2007, 8-9 曹 他 2009, 10 北京市文物研究所 2007, 11 申編 2003, 12 曹 他 2009, 13 北京市文物研究所 2007, 14 曹 他 2009, 15 賀・劉 1993, 16 北京市文物研究所 2007, 17 曹 他 2009, 18 内蒙古文物考古研究所 2009a, 19 北京市文物研究所 2007, 20 西安市文物保護考古所 2005, 21 曹 他 2009, 22 内蒙古文物考古研究所 2009a, 23 北京市文物研究所 2007, 24 梁・侯 2014, 25 E. C. Bunker 1997, 26 北京市文物研究所 2007

図 15. 1-4 陝西省考古研究所 2006, 5 中国科学院考古研究所 1962, 6 蘇秉琦 1948, 7 閻 1989, 8 陝西歴史博物館 2008